岩波講座　東洋思潮

西南亜細亜言語の系統

松本重彦

岩波講座 東洋思潮（東洋言語の系統）

西南亞細亞言語の系統

松本重彦

岩波書店

西南亞細亞言語の系統

松本重彦

一

西南アジヤの言語の系統を問題にすれば、どうしてもアラビヤ語、ペルシャ語、トルコ語の所屬を說くことが主になるやうに思はれる。それをいふにつれて、これらの言葉とひっかゝりのあるいろいろの言葉が引き合ひに出て來、さまざまの重要な言語學上の問題にもぶつかって、どうしてもそれを解いて行かねばならず、またそれを解くことによって、與へられた西南アジヤの言葉の系統といふ問題の核心に觸れることもできるのである。

アラビヤ語、ペルシャ語、トルコ語とならべて見ても、たゞ見ただけでは、意味がないやうであるが、よく考へれば、意味の深いことが感ぜられる。まづこの三つの言葉は全く系圖を異にするものである。ところが今日では三つともアラビヤ文字を以て書かれる上に、宗教上及び歷史上の因緣によって、まづペルシャ語がアラビヤ語の感化を受けて、著しく多くのアラビヤ語の單語を入れ、夥しくアラビヤ語の熟語や成句を使ひ、その上にアラビヤ語の文法の影響をも蒙って、うはべからは雜糅語としか見えなくなってゐる、そしてトルコ語がアラビヤ語の感化を受けるとともに、ペルシャ語の感化をも受けて、著しく多くのアラビヤ語の單語とともに著しく多くのペルシャ語の單語を入れ、夥しくアラビヤ語の熟語や成句とともにペルシャ語の熟語や成句を使ひ、その上にアラビヤ語の文法の影響とともにペルシャ語の文法の影響を蒙って、これまたうはべからは雜糅語としか見えなくなってゐる。それでこの三つの言葉

は、書いたのを見ても素人の目には同じやうな言葉としか映らず、話すのを聞いても素人の耳には同じやうな言葉としか響かず、やゝこの三つの言葉の文法を知ったもののみにその根本に於ては全く同じからざるものであることを示すのである。例へば「月の光」といふことをアラビヤ文語では nūru-lḳamari といひ、ペルシャ文語、トルコ文語では nūr-i ḳamar といふ。ペルシャ文語とトルコ文語とが全く同じであるのは、トルコ文語がペルシャ文語の形をそのまゝ取って用ゐたからである。一目見てもわかるやうに、二つともよく似てゐて、違ふところは第一の單語たる nūr の末に一方には u がついてゐるのに、他の一方にはそれがなく、第二の單語たる ḳamar の末も一方には i がついてゐるのに、他の一方にはそれがなく、またこの二つの單語を結び附けるのに一方は第二の單語の頭に l を冠らせ、他の一方は第一の單語の尾に i を履かせることとである。nūr「光」ḳamar「月」ともにアラビヤ語であって、それがペルシャ語、トルコ語にはいったのである。nūru-lḳamari と nūr-i ḳamar との二つをはじめて見、または聞いた人は、恐らくは同じやうな言葉としか感じないであらう。やゝ文法を知って、l は第二の單語の戴く冠詞の al が第一の單語の語尾の u に引かれて落ちたものであり、この第一の單語に冠詞がないのは構造格といって下に生格を迎へる形であり、第二の單語の語尾が i となってゐるのは生格の形であることがわかると、ざっとアラビヤ語の名詞の文法の輪郭が得られ、また第一の單語と第二の單語との間にある i は名詞と名詞、または名詞と形容詞を結び附けるために受ける方の名詞の末に添へる母音であることがわかると、それでペルシャ語の名詞の文法の大體が知れて、アラビヤ語とペルシャ語とは根本に於て文法が違ふといふことに氣がつくのである。さらに文章の組み立て方を較べれば、根本に於て同じからざることがいよいよはっきりする。「父が子供に一冊の本を與へた」といふことをアラビヤ文語では

'A'tā-l'abū kitāban 'ilā-lwaladi といひ、ペルシャ文語では Peder be-piser jak kitābrā dād といひ、トルコ文語では Peder ogla bir kitāb werdi といふ。三つともに共通なのは kitāb で、これは「本」といふ意味のアラビヤ語、またペルシャ語とトルコ語とには peder といふのが共通で、これは「父」といふ意味のペルシャ語である。文章の組み立て方を較べるために文章の中の單語の順序をいふと、アラビヤ語は「(彼)が與へた、冠詞、父が、本を、に、冠詞、子供」であり、ペルシャ語は「父、に、子供、一つの、本を、(彼が)與へた」であり、トルコ語は「父〔が〕、子供に、一つの、本〔を〕、(彼が)與へた」であつて、アラビヤ語だけが目立つて違ひ、ペルシャ語とトルコ語とは大體似てゐることに氣がつく。細かに較べると、「に」といふ意味がアラビヤ語とペルシャ語とでは前置詞でいはれるのに、トルコ語では格助詞でいはれること、また「を」といふ意味がアラビヤ語では語尾變化であらはされ、ペルシャ語では一種の助詞を以てあらはされ、トルコ語では何のあらはしもないことにも氣がつく。ついでにいふ、トルコ語では「を」といふ意味をあらはすのにも格助詞を添へるのが正則であるが、この例のやうに「一つの」といふやうな言葉がつくと、その格助詞を省いていはないのである。かやうにしてだんだんにアラビヤ語、ペルシャ語、トルコ語の三つは、今日ではどれほどそのうはべの形が似てゐても、根本に於ては全く同じからざるものであることが了解されるであらう。

　アラビヤ語、ペルシャ語、トルコ語の三つは西南アジヤの地に於て最も有力な言葉である。アラビヤ語は宗教の言葉として、ペルシャ語は文學の言葉として、トルコ語は少くとも大戰の前までは政治の言葉として、西南アジヤの民を支配したものである。大戰のためにトルコが崩れて、トルコ語の勢はもはや昔のごとくではないが、それでも惰力

はなほある。アラビヤ語とペルシャ語とに至っては、もとよりその勢を失ふところがない。これは今の話であって、昔のことに心を向けるものに取っては、この三つの言葉のこの西南アジヤの地に於ける勢が久しくつゞいたがために、どうしてもこれに兼ね通じなくては不便が少くないところから、ヨーロッパに於ては東洋學に志す人々はまづこの三つの言葉を學んで、それを土臺にして外の言葉に渉るのが長い間の習はしを成し、今日でもなほその風を改めない。學問の開けなかった時分にはこの三つの言葉を「東洋の三つの言葉」と稱へて、兼ねてその堂奥に入らずんば止まずといふ勢を示した學者も珍らしくはなかった。學問が開けてこの三つの言葉は三つの相異なる系統に屬する言葉であることがはっきりした上に、言葉の研究はどうしても同じ系統に屬する數多くの言葉に當らないと進み得ないものであるといふことが明かになったので、三つとも兼ねてその堂に上らうといふやうな野心をもつ人は少くなった。しかしはじめて東洋の學に志すものがまづこの三つの言葉を學ぶといふ風はなほ殘ってゐる。これは第一には文字が同じく、第二にはアラビヤ語の知識はペルシャ語を學ぶ道をよほど平かにし、アラビヤ語とペルシャ語とを知ってゐれば、トルコ語を知るには何の苦勞もなく、第三にはこれら三つの言葉を話す國民は昔から宗教を同じくし、文化を同じくして、いろいろの點から兼ね學び易いからでもあるが、これら三つの言葉を併せ學べば、互に相助けて爲になることが多いのが本になってゐるのであらうと思ふ。

アラビヤ語、ペルシャ語、トルコ語の三つは西南アジヤの地に於て最も有力な言葉であるとともに、またこの地に於ける三つの大きな言葉の系統を代表する言葉でもある。この西南アジヤの地にかつて行はれた言葉にはこれらの三つの言葉の系統に屬しないものもあったが、今日この地に行はれる言葉はすべてこれらの三つの言葉の系統のいづれ

かに屬する。もっとも普通に西南アジヤと呼ばれる地域から少しく北に出たカフカズの地には、全くこれらの言葉と系統を異にする言葉が行はれてゐて、遠い昔に遡ると、このカフカズの地に今行はれてゐる言葉と系統を同じくするであらうと考へられる言葉がメソポタミヤから小アジヤへかけてずっと廣く行はれてゐたやうであるが、そのことは後に述べることにして、こゝではいふまい。さてアラビヤ語、ペルシャ語、トルコ語が三つの大きな言葉の系統を代表するといふのは、アラビヤ語がセミト語系を代表し、ペルシャ語がインドヨーロッパ語系を代表し、トルコ語がトルコ語系を代表するといふことである。アラビヤ語がセミト語系に屬し、ペルシャ語がインドヨーロッパ語系に屬し、トルコ語がトルコ語系に屬することは、もはや今日では常識であって、改めていふのがむしろ餘計のやうに思はれるであらうが、この最も常識的なことをもかい摘んで述べて置かないと、都合がわるい。

セミト語系といふ名にしてからが、今日では誰でも何のこだはりもなく用ゐてゐるけれども、これが學界の通語となるまでには迂餘曲折がある。セミトといふ名は舊約書の創世記に出で來るセムといふ傳說的人物の名から作ったもので、平たくいへば、「セムに屬する」とか、「セムの血筋を引いた」とかいふ意味をあらはす言葉である。セムといふ傳說上の人物の子孫のことの書いてあるのは、舊約書の創世記の第十章で、そこには古代ヘブライ人の知ってゐた世界の人類をすべてノアの子セム、ハム、ヤペテの三人から出たものとし、ヘブライ人をセムの子アルパクサデから血筋を引いてゐるものとし、セムの子にはこのアルパクサデの外にエラム、アシュル、ルデ、アラムを擧げ、それらのものの子孫にも及び、これらはその系圖、言語、住地、屬民の上よりしてセムの子孫であるといってある。この記事はごく手短かにいふと、舊約時代のヘブライ人が世界の諸國民をどういふ風に見てゐたかを示すもので、當時のヘ

ブライ人の歴史的感情をあらはしたものに過ぎない。エラムとルデとをセムの子としてあるが、これらはアッシリヤの被管であったといふだけで、ヘブライ人とは人種も違へば、言葉も似たところがないものであり、またヘブライ人と人種の上からも、言葉の上からも最も近いカナアンをクシ、ミツライム、フテとともにハムの子と書いてゐるのは、當時カナアン人（フォイニケー人）が政治上にも、文化上にもミツライム（エジプト）と密接な關係をもってゐたのに本づいたものである。故にこの記事は元來人種の差別、言語の異同を主眼としたものとはいはれないのである。近代に至ってヘブライ語とアラビヤ語の似てゐることが明かになり、ヘブライ語とアラマイ語の似てゐることも知られ、これらの言葉とエチオピヤ語の似てゐることもわかって來ると、これらの言葉を一まとめにして呼ぶ名稱のないのを不便とするやうになった。それで西暦一千七百八十一年にアウグスト・ルトヴィヒ・シュレーツェルがゴトフリート・アイヒホルンの「聖書及び東洋文學綱要」とでも譯すべき表題の本の中の一項として執筆した「カルデヤ人について」といふ文の中に、創世記第十章の記事によってこれらの言葉を「セムに屬する」もしくは「セムの血筋を引いた」言葉といふつもりで Semitisch と呼ぶがいゝと唱へ出し、後六年、卽西暦一千七百八十七年にアイヒホルン自らその著「舊約書階梯」の第二版にこの新らしい名を用ゐたが、それがきっかけとなって Semitisch とか、Semiten とかいふ言葉がかういふ目的で用ゐられることになったのである。Semitisch といふ言葉は舊約書の中の傳說上の人物の名 Sem に系統または所屬をあらはす後綴 -it を加へて Semit といふ名詞を作り、それにドイツ語の形容詞を作る綴 -isch を加へて形容詞の形にしたものであり、Semiten といふのは Semit といふ名詞の複數の形である。また英語ではこれを Semitic といひ、Semites といふ。故にこれをわが國語に入れるに當っては、必ずセミトといはねばならぬ

と思ふ。世にはやゝもすればセム人種とか、セム語系とかいふ言ひ方をする人があるが、セムといふのは個人の名であるから、セム人種とか、セム語系とかいふのは奇に過ぎるやうな氣がしてならない。

ヘブライ語、アラマイ語、アラビヤ語、エチオピヤ語などが同じ言葉の系統に屬すること、及びそれがセミト語系と呼ばるべきことは、すでに西暦第十八世紀の末には人のよく知るところとなった。そして第十九世紀に入っては楔形文字が讀めるやうになり、バビロン語がわかるやうになって、これまたこの語系に屬するものなることが明かになり、さらに古代エジプト語もこの語系に屬することがアドルフ・エルマンの長い間の研究によって動かざるものとなった。荒っぽくいへば、まづかくのごとくであるが、今日に於てはこのセミト語系のいろいろの言葉が極めて細かに調査され、古來どういふ言葉があったか、古今を通じてすでに知られたこの語系の一つ一つの言葉の親疎關係はどうであらうか、すでに知られたこの語系の一つ一つの言葉にあらはれる音韻の組織、單語の形式、文章の構造などは、どういふ沿革があってさうなったか、また現に生きてゐる言葉については、それがこの後どういふ風に變化して行くであらうかといふやうなことが明かにされ、さらに進んでこの語系に屬する言葉を話すものは共同の祖先から出たものに相違なかるべきこと、その祖先の住んだところも推し測られぬ筈のないことが問題になり、この問題も遠からず解決されるであらうといふところまで行ってゐる。

インドヨーロッパ語系といふ名は、セミト語系といふ名に較べると、普通の人にはよほど親しみが深いであらう。だがこの名のできたのはセミト語系といふ名のできたのよりやゝ新らしい。はじめてインドヨーロッパ語系といふ名を用ゐたのはトマス・ヤングで、それは西暦一千八百十三年にクォータリ・レビウの第十卷に出た論文にある。この

論文の中にはこの新らしい言葉を用ゐたのについて何の說明もしてない。恐らくヤングは說明などをしないでも理會されると思ったのであらう。このインドヨーロッパ語系といふことをドイツでは一般にインドゲルマン語系といふ。インドゲルマン語系といふ名は西暦一千八百二十三年にフランツ・ボップが用ゐたのが始である。ペルシャ語がギリシャ語、ラテン語、ゴート語、ドイツ語などのヨーロッパの言葉と近い緣故をもってゐることは、西暦第十八世紀の末にサンスクリトがヨーロッパに知られた頃にはすでに認められてゐたのであった。すなはち西暦一千七百八十六年にはウィリヤム・ジョンズがこれを認めてゐる。ついで西暦一千八百八年にフリートリヒ・シュレーゲルが「インド人の言語及び知識について」といふものを書いてこのことをいひ、西暦一千八百十六年にボップがサンスクリトの動詞の活用の形式についての論を書くに及んで動かぬものとなった。これについでヤコプ・グリムやポットの研究が出て、一層詳しくなった。ドイツで用ゐられるインドゲルマンといふ名は東西の兩極端を取ったもので、頗る面白いのであるが、ゲルマンを以て西方を代表させるのが片腹痛く思はれるのか、ドイツより外の國ではあまり用ゐず、概ねインドヨーロッパといふのを用ゐる。なほこれに代へてアーリヤ語系といふ名がイギリスでは一時用ゐられたこともあったが、今はすたれた。またインドケルト語系といふ名も出たことがあるが、これも行はれない。

このインドヨーロッパ語系といふものをまとめ、これに屬する言葉の比較硏究をはじめたのは、前にも述べたやうに、ボップであって、それよりして今日に至るまでわづかに百二十年ばかりであるが、その間に於けるインドヨーロッパ言語學の進步といふものは實に驚くばかりで、新たに發見された言葉で、この言葉の系統に屬することが確かめられたものも少くない。その二三をいへば、東(ひがし)トルキスターンの地にむかし行はれたトカラ語、トルキスターンの地

にむかし行はれたソグド語、小アジヤの地にむかし行はれたハッチ語などである。トカラ語の遺存は西暦第六世紀及び第七世紀に成った佛教文獻で、インドのブラフミー文字で書かれてゐる。發見は大部分ルコクとグリューンヴェーデルとの手で成された。この言葉はインドヨーロッパ語系の中で獨立の一派をなすものといふことになってゐる。ソグド語の遺存は西曆第八世紀から第九世紀までのものを主とするが、古いものもいくらか殘ってゐて、中には西暦のはじめ頃のものさへある。文字はアラマイ起原のものであるが、ペフレヴィー文字とは同じくない。この言葉は中世イーラーン語の一つと見做される。すなはちインドヨーロッパ語系の中でペルシャ語の屬する派の中に入るべきものである。ハッチ語の遺存は一種獨特な象形文字で書かれたものが古くから注意されたが、讀むすべも知られず、従ってその言葉も知ることができなかった。しかるに西暦一千九百六年と一千九百七年とに小アジヤのボガズキョイといふところからフーゴー・ヴィンクレルとオトー・プフシュタインとの手によって約一萬個の楔形文字を記した粘土版が發見され、これらの楔形文字の書きものは、一部はバビロン語であるが、一部はハッチの言葉であることがわかり、これを發掘したボガズキョイといふところがむかしのハッチ國の首府であったことも證明された。ヴィンクレルもプフシュタインもこの貴重な材料を利用せずに死んだが、その後フレデリク・フロズニーが西暦一千九百十五年にドイツ東洋學會の會報にこの言葉の研究を發表し、この言葉がインドヨーロッパ語系に屬することを述べた。これに對して當時も、またその後もいろいろの批評もあり、異說も出たが、今ではフロズニーの說いたところは間違がないといふことに落ち着いた。ハッチは舊約書の申命記第二十章などにいはゆるヘテ人で、創世記第十章にいはゆるカナアンの子ヘテの後とせられるもので、西南アジヤの古代史の上にはつねに大きな役をつとめたものであった。その言葉

が全く知られなかったがために、この國民の精神生活に立ち入ることができず、史家にとっては靴を隔てて痒きを搔くがごとき思ひをなしたが、その言葉が知れたのであるから、小アジヤの古代史の研究のための祕密の鍵が手に入った譯で、實に何ものにも勝る寶と喜んだのも、もっともなことである。このハッチの言葉は文法の上からはインドヨーロッパ語であることが動かないのであるが、語彙は何となくインドヨーロッパ的ではなく、むしろ雜糅語のやうなので、だんだん研究を進めて行くと、楔形文字を用ゐるところからのバビロン語の影響ばかりではなく、もっと外のものもまじってゐるやうに思はれ、ハッチの古彫刻にあらはれた人物の姿を見ると、人種的にもいろいろなものがまじってゐるやうに感ぜられ、また古い文獻に、「神事にはハッチ、ルヤ、フリの歌をうたふ」とか、「カネシの歌人も加はる」とか見えることが知れた。これによってフロズニーとフォレルとは西曆一千九百十九年より一千九百二十年までに、すでに明かになってゐるハッチ語の外にいくつかの言葉がハッチの國に存したことを發見するに至った。第一には田舍の住民、首府では下級の役人、力役をなすもの、神職などの用ゐた言葉で、これはインドヨーロッパ語系に屬せざるものである。フロズニーはこれをハッチ語と名づけ、インドヨーロッパ語たるハッチ語をヘチト語と呼んだが、フォレルはこれをプロトハッチ語と稱へて、インドヨーロッパ語たるハッチ語と分たうとした。第二はルーヤ語、またはアルザリ語と呼ばれるもので、プロトハッチ語を用ゐない田舍の住民が用ゐた言葉である。これはインドヨーロッパ語である。第三はフリ語と呼ばれるもので、これはハッチ國の東北地方の言葉であった。これはインドヨーロッパ語系には屬しない。ハッチ國民の用ゐた言葉はハッチ語、プロトハッチ語、ルーヤ語、フリ語と四通り迄わかったのであるが、その中でハッチ語とルーヤ語とがインドヨーロッパ語系に屬し、プロトハッチ語とフリ語とはイ

ンドヨーロッパ語系に屬しないことも確かめられた。インドヨーロッパ語系の中でハッチ語とルーヤ語とがどういふ位置を占めるかといふに、これらはペルシャ語やアルメニヤ語などとは縁が遠く、むしろトラキヤ語、ギリシャ語などの方に近いといふことである。インドヨーロッパ語ならざるプロトハッチ語とフリ語とはカフカズの言葉に關係があるのではなからうかといふ說もある。インドヨーロッパ言語學の進步はたゞ多くの發見を成し遂げて、その範圍を廣めたのみではなく、その最も精彩ある部分は、語法の沿革や語原の研究を深めて行くとともに、また應用の域にも進んで、人類の文化の跡の研究のために重要な貢獻をなしてゐるところにある。ことに應用の方面になると、インドヨーロッパ言語學はたしかに他の言葉の系統の言語學の企て及ばざるところまで進んでゐて、言語學卽インドヨーロッパ言語學といふより外はないありさまである。

トルコ語系といふのはトルコ語といふのに基くこと、いふまでもない。たゞトルコ語といふのには狹い意味でいふのと、廣い意味でいふのとがあり、狹い意味でいふのはトルコ國民の言葉で、正しくはオスマンリ・トルコ語といふべきものを指し、廣い意味でいふのはボスニヤからシベリヤの東北部までを包括する廣い地域に住んで、トルコとか、タタールとか、キルギスとか、ウズベクとか、その外いろいろの名で呼ばれる種族の言葉を指すが故に、その廣い意味でいふのによってこの言葉の系統としたのであるといふことを注意して置かう。ひとしきりはこのトルコ語系といふ名の代りにトルコ・タタール諸語と呼ばれたことがあり、やゝ古い本にはさう書いてあるが、今ではあまり行はれなくなった。この語系に屬する言葉は、ざっと數へても、二十あまりに及ぶ。そして最も深く研究されてゐるのはオスマンリ・トルコ語であるが、その外のトルコ語もだんだんに學者の注意に上り、この語系に屬する言葉に共通する

性質もわかるやうになった。ことにミズラ・カシム・ベイは「トルコ・タタール語の一般的文法」といふ本をロシヤ文で書いて、廣い意味でいふトルコ語の一つ一つには極めて緊密な關係があることを明かにし、ユリウス・テオドル・ツェンケルはこの書をドイツ文に譯出して、その說をひろく西ヨーロッパに紹介した。ドイツ譯本の出たのは西曆一千八百四十八年のことである。これによって西ヨーロッパはトルコ語系の知識をよほど深めたことであった。オトー・フォン・ベートリンクが「ヤクート人の言葉について」といふ本を書いたのは、西曆一千八百八十一年のことであるが、これによってトルコ語系についての知識は急に進んだ。ヤクート人はレナ河の流域を中心として、東はコリマ河に及び、西はハタンガ灣に至るまでの地に住む種族で、その人口はあまり多くないが、その言葉はロシヤのカザン縣とその附近に住むチュヴァシ人の言葉と極めて近い緣故があり、この二つだけがあらゆる外のトルコ語に對して獨特な地位を占めるので、頗る重要なものである。ベートリンクの「ヤクート人の言葉について」といふ本はトルコ語について書かれた眞に學問的なもののはじめであるとさへいはれる。このヤクート人の周圍に住むものは、すべてモンゴル種族に屬するものばかりで、外のトルコ人から見ると、このヤクート人の住むところは飛び地のやうになってゐるために、これがトルコ種族に屬することも、はっきりしなかったのであるから、この本の與へた知識は頗る大きいといはねばならぬ。

トルコ語系の研究はそれより次第にその範圍を廣めた。今は死に絕えた同系の言葉もおひおひ發見せられて、トルコ語系についての知識を深める材料になった。その一つはケク・トルコ語で、これが遺存はバイカル湖の南、オルホン河の流域から出た西曆第八世紀の碑文である。これは古代トルコ語の碑文といふあまり適當でない名で知られてゐ

るものであるが、西暦一千八百九十三年にヴィルヘルム・トムセンによって按讀せられた。もう一つはウイグル語で、これが遺存の重なものは西暦第十一世紀に成ったカタドグ・ビリクといふ詩篇である。それからクマン語であるが、これはヴェネチヤのサン・マルコ寺の圖書館に保存されるコーデキス・クマニクスと呼ばれる本によって傳はってゐる。クマン人はトルコ種族の中の最も重なものの一つで、セルジュク・トルコに近いものと考へられる。このものは西暦一千三十年頃ヨーロッパに逼り、ウラル山とヴォルガ河との間の地を取ったが、西暦一千一百二十年より後にキプチャク國に合併し、西暦一千二百二十八年に至ってモンゴル人の攻撃を受け、一部のものはドナウ河を渡ってブルガリヤに入り、一部のものは西暦一千二百三十九年にホンガリヤに落ち着いた。その苗裔と信ぜられるものは今もブルガリヤにもあり、ホンガリヤにもあるが、ブルガリヤにあるものは早くブルガリヤ風になり、ホンガリヤにあるものも全くホンガリヤ風になって、もはや昔の面影を留めない。又クマン語を話すものは西暦一千七百七十年迄はあったといふことである。コーデキス・クマニクスは西暦第十四世紀に成ったもので、不完全な字引と、宗教上の歌と、謎を集めたものなどを含むのであるが、この言葉が東部トルコ語の一つとして趣味の深いところから、かなり研究が試みられてゐる。既に述べたやうに、トルコ語系に屬する言葉は今日知られてゐるものがざっと數へても二十餘りあるのであるが、探檢旅行や、學問的發掘は今後なほ多くの新しい言葉を發見して、この語系を豐富にし、この語系に屬する言葉の性質をさらにはっきりさせるやうにもなるであらうと思ふ。このトルコ語系をモンゴル種族の言葉やトゥングス種族の言葉と一まとめにしようといふ說もあるが、トルコ語系の言葉とモンゴル種族の言葉とトゥングス語系の言葉との間にかなり似通ったところのあることは感ぜられるけれども、これらのものの間にどういふ關係がある

かは、まだ深く研究されてゐないことで、一種の思ひつきたるに止まる。ネーメットが西暦一千九百十二年に書いた「トル・コ・モンゴル臆說」はトルコ語系の言葉とモンゴル種族の言葉との間に存する緣故について學問的の研究を試みようとしたものであるが、要するに臆說であって、しっかりした論斷には至ってゐないのである。故にトルコ語系をモンゴル種族の言葉やトゥングス種族の言葉と結び付けようとする企は、今日のところでは全く學問上の意味をもたぬものといはざるを得ない。こゝに附け加へて置きたいと思ふのは、メソポタミヤに於けるセミト以前の住民たるシュメル人の言葉もこのトルコ語系に屬するのではなからうかとの說があることである。この言葉の遺存の最も古いのは西暦前四千年にも上り、それより西暦前二千年に至るまで、實に二彌連の間中世ヨーロッパに於けるラテン語と同じやうな役目をなし、その後數世紀の間公用語たることを失はず、やがて宗教上の用にのみ限局せられたが、西暦前三百年アルサケス王朝の起る頃まではその命脈を存した。この言葉の性質はまだ明かならざることが多く、すでに知られたところだけについていへば、どの言葉にも見られないやうな特色があるやうにも思はれるし、一つ一つの點を取って見ると、隨分いろいろの言葉と似通ったところが出て來もするので、その所屬を云々するのは早きに失するが如くであるが、ことにトルコ語に似たところが多く、その上に古い彫刻によると、シュメル人の容貌はトルコ人に極めてよく似てゐるので、トルコ語系に屬するものと考へるのが最も穩當であらうといふのである。これはオーペール、ルノルマン、ホンメル等の說くところで、學問上の根據はなほ薄弱といはねばならぬが、その後あらはれたいろいろの說に較べると、なほ勝ちみがあるやうに思はれる。ヒュージンクはバルマ語と似てゐるといひ、ドレクセルは中アフリカのボルヌ語と似てゐるといひ、クルークはオセアニヤとアフリカとの言葉であるといひ、クリスチヤンは

スダーンの言葉の性質を帶びてゐるといひ、トロンベッティとフォルクとはカフカズの言葉に屬するといふ類で、いづれも少しの似寄りを本にして大膽な論を立てたもの、まじめに相手にするだけのものはないのである。故にやはりトルコ語系とする說がましであるといはざるを得ない。シュメル語がトルコ語系に屬するといふ說はすこぶる興味が深い。もしさういふことになれば、この西南アジヤの言葉は昔も今も主としてはセミト語系、インドヨーロッパ語系、トルコ語系に屬するものであるといふことになって、大いに歷史的感情を滿足させるのである。

西南アジヤの地の昔から今に至るまでの言葉を知り得るかぎり集めて見ると、必ずしもこの三つの語系に入れられるものばかりではない。メソポタミヤ（これはギリシャ語で、アラビヤ語でいへば、ナハライニ）にむかし行はれたミタンニ語、アルメニヤのヴァン湖の地方にむかし行はれたウラルトゥ語、スシアナ地方にむかし行はれたエラム語、ザグロス山脈の東北にむかし行はれたカッシュ語などは、セミト語系にも、インドヨーロッパ語系にも、トルコ語系にも屬せざるもののごとくである。これらの言葉に近い緣故があると思はれる言葉は、今は西南アジヤと呼ばれる地域には跡を留めないけれども、黑海と裏海との間の地、カフカズと呼ばれる地に今も行はれる言葉がこれに近いのではないかと見られる。この比較もまだほんとに試みに過ぎないのであるが、これがもし當を得れば、頗る面白いと思ふ。まづわれわれの歷史的感情はそれによって滿足される。およそ史上の形勢は古今その趣を同じうするものであると思ふ。むかしギリシャ民族の大いに膨脹したとき、地中海の東の海岸も、そこに散在する島々も、みなギリシャの植民に占められ、さらに遠くイタリヤの南部に及んだといふことは、誰でも知るところの歷史であるが、今日でも小アジヤ、シリヤ、パレスチナ、エジプトなどの沿岸とこれに屬する島々はいふに及ばず、それよりも北、それよりも

西の地まで、多くのギリシャ人が移り住んで、いろいろの產業に從ひ、これらの地の主人公たるアラビヤ人を凌駕してゐるありさまは、今を去ること十數年前に親しくこれらの地を旅行して知り得たことである。史上の形勢が古今その趣を同じうするものであることは、すでに述べたところでも明かであらうと思ふ。

西南(にしみなみ)アジヤの地にセミト語系の言葉、インドヨーロッパ語系の言葉、トルコ語系の言葉、カフカズ地方に行はれる言葉（南カフカズ語系及び北カフカズ語系）を話すものが、昔も住んでゐたし、今もなほ住んでゐるとしたならば、頗る興味があるではないか。古代エジプト學者ブレステッドの說であったか、古代エジプト人の彫刻に見える顏立や姿をしたものが今日のエジプトのフェラハの中には頗る多く、アッシリヤ人の浮彫に見える顏立や姿をしたものが、今日のクルディスターンの土人に頗る多いのを見ると、古代エジプト人の血筋はフェラハの中に殘り、アッシリヤ人の血筋はクルディスターンの土人の中に殘ると見てよからうといふ意味のことを讀んだ記憶があるが、これまたすでにしばしば述べたところの歷史的感情の發表である。およそ歷史を修めるものは、古今その趣を同じうするものであるといふことを常に頭に置かねばならぬ。それを忘れると、解釋のできないことが多くなるであらうと思ふ。

二

アラビヤ語の特色で、あらゆるセミト語に通ずるものが十二个條ほどある。そしてそれを說けば、アラビヤ語の性質がはっきりするばかりでなく、セミト語の性質も大方は知れると思ふ。

（一）アラビヤ語の音の特色は、第一には喉音の多いことである。すなはち、ḥ，x，ʻ，h の五つがあらはれる。ヘブ

ライ語、フォイニケー語、アラマイ語などにはḥがなく、アッカド語に至っては，とxとの二つきりになってゐる。この點に於ては、アラビヤ語が最もよくセミト語の本來の面目を保つものと考へられ、ヘブライ語、フォイニケー語、アラマイ語などはいろいろの理由によって、もとḥと發音したものを或はh、或はxと發音するやうになつたものであるとし、アッカド語はḥもxもhもみな同じやうにxと發音し、，と‘とを區別することもできなくなって、一つになったものとするのである。

(二)つぎに有聲音の存在である。アラビヤ語にはṭ・ḍ・ṣ・ẓ・ḳの五つがあらはれる。アッカド語、ヘブライ語、フォイニケー語、アラマイ語などにはたゞṭ・ṣ・ḳだけを存し、ゲエズ語にはṭ・ṣ・ḳの外にḍがある。南アラビヤの古語にはṭ・ḍ・ṣ・ẓ・ḳの外にθ・ɤ・の二つがある。gの有聲音すなはちġとも記すべき音も、もとはあったかと思はれるのであるが、それを立證する方法はない。

(三)śとšとの區別があったことである。これはアラビヤ語にもすでになくなってゐることで、たゞその痕跡がヘブライ語のプンクタチオーンの上に殘ってゐることによって、その事實が認められるといふに止まるが、それでもともとはアラビヤ語にも、また爾餘のセミト語にも、おしなべてあったであらうことを思はしめ、どうしてもセミト語の音の特色の一つとして擧げざるを得ないのである。

(四)子音が單語の内容を決定し、母音はたゞその樣式を示すに過ぎないことも、アラビヤ語の、そしてセミト語の特色の一つである。セミト語にかういふ特色のあることは、もとからセミト語を話すものにははっきり知られてゐたので、セミト語を話すものの作った文字は專ら子音をうつすのを事とし、母音は殆んどこれを省みなかった。エジ

プトの表音文字がその形象をいふ單語の語頭子音であることは忘るべからざることである。エジプト語がセミト語でなかつたならば、エジプト人はさういふ文字を考へることもできなかつたであらうと思ふ。エジプト語をハミト語、エジプト人をハミト人などといふのは、舊約書創世記第十章に記すところに捕はれたもので、學問上の意味のあることでは少しもない。ついでにいふ、セミト語の中で、母音を文字であらはすのは、アッカド語と、ゲエズ語及びその系統(すぢ)を引いた言葉（チグレ、チグリニャ、アムハラ等）のみである。アッカド語が綴音文字を用ゐるのは、シュメル語の文字を假りたためであり、ゲエズ語が綴音文字を用ゐるのは、もとの子音文字と、母音を示すためにこの子音文字に附ける符號とが合して一體となつたものに過ぎない。

子音が單語の內容を決定すると普通いふのであるが、實はさういつただけでは充分ではなく、子音とその順序とが內容を決定するといはねばならぬ。m-l-k は「所有する」「支配する」といふ意味をあらはすが、さういふ意味になるのは、この順に竝んだときだけのことで、同じ子音の群でも、順が違へば、意味が違ふのである。m-k-l は「泥が深い」l-k-m は「毆(なぐ)る」l-m-k は「屈服する」k-l-m は「傷がつく」k-m-l は「完全である」たゞし m-l-k は、この順序で竝んでゐるかぎり、どんな母音がどこにくつつかうが、どんなに多くくつつかうが、またそのいづれの部分に別(ほか)の子音が添へられようが、さういふ子音がいくつ加へられようが、もとの意味が失はれることはないのである。malaka は「所有する」「支配する」といふ動詞、milk でも、mulk でも、「所有」といふ名詞、malik でも、malk でも、「所有者」といふ名詞、malik は「王」といふ名詞である。mallaka は l が重なつたけれども、「所有させる」「支配させる」といふ意味であり、また ʾamlaka は頭に ʾ が加はつたけれども、やはり「所有させる」「支配させる」と

いふ意味である。なほ tamallaka は l が重なった上に、頭に t が加はったが、その意味は「主人となる」tamālaka は頭に t が加はり、m のつぎの母音が長くなってゐるが、その意味は「抑制する」'imtalaka は頭に，が加はり、m のつぎに t がはいってゐるが、その意味は「所有する」また 'istamlaka は頭に ，s t の三つの子音が加はってゐるが、その意味は「所有とする」「獲得する」である。また malika(t) は「女王」malakāt は「特色」malakūt は「權力」mamlaka(t) は「王國」mamlūk は「マメルク士兵」等。また k-t-b は「書く」といふ意味を決定する。kataba「書く」kattaba「書かす」「隊に分れる」kātaba「手紙をやる」'aktaba「口授して書かす」takattaba「隊を分ける」tak-ataba「互に文通する」'iktataba「記入する」「豫約する」'istaktaba「書くことを求める」kitāb「本」kutubīj「本屋」kitāba(t)「碑文」kātib「書記」maktab「學校」maktaba(t)「圖書館」mukataba(t)「通信」maktub「手紙」等。單語の屈曲も主として母音の轉換によって行はれる。例へば kitāb「本」のごときも、kitābun「本が」kitāban「本を」kitābin「本の」kitābani「二冊の本が」kitābaini「二冊の本を」「二冊の本の」kutubun「多くの本が」kutuban「多くの本を」kutubin「多くの本の」といふやうになり、また kataba「彼が書いた」のごときも、jaktubu「彼が書く」jaktuba「彼が書くことを」(接續法) jaktub「彼書くべし」(下知法)といふやうになる。なほアッシリヤ語において、ikšud「彼が到著した」ikašad「彼が到著する」といふ例も、併せ考ふべし。

(五) 子音の發音は嚴格であるけれども、母音の發音はやゝ寛緩である。故に方言の差別のごときも、概しては母音の差異である。「本」を文語では kitāb といふ、アラビヤの各地方、イラーク、エジプトなどでは kitāb といふが、シリヤでは ktēb といひ、マグレブ諸地方ではおしなべて ktēb といふ。「子供」を文語では walad といふ、アラビ

ヤ各地方、イラーク、エジプト、シリヤでは walad といひ、チュニジヤ、アルゼリヤ、モロッコなどでは wled といひ、また中アフリカのチャドからウァダイあたりまでの地でも同じく wled といふ。また同じくセミト語系に屬する一つ一つの言葉を取つて較べて見ても、同じやうな趣が見える。「頭」はアラビヤ文語では ra's ヘブライ文語では rōš フォイニケー文語では rōš アラマイ文語では rēšā ゲエズ文語では rĕ'ĕs アッカド文語では rēšu である。「犬」はアラビヤ文語では kalb ヘブライ文語では keleb フォイニケー語では kalb アラマイ文語では kalbā ゲエズ語では kalb アッカド語では kalbu である。こゝにヘブライ語だけが第三子音を v とするのは、ヘブライ語に於ては、母音につゞく b g d k p t は必ず v γ ð x f θ に轉ずるといふ規則があるからであって、それを取り除けていへば、別の言葉と違った趣はない。「地」はアラビヤ文語では 'arḍ といふ、ヘブライ文語では 'ereṣ アラマイ文語では 'ar'ā アッカド語では 'erṣetu サバの古碑にある形はアラビヤ文語の形とよく合ふ。ヘブライ語、アッカド語に於て終りの子音が ṣ となってゐるのは、ḍ の音が ṣ の音で代用せられるのであり、アラマイ語にそれが、' となってゐるのは、これで代用せられるのである。さういふと、子音の轉換もしばしば行はれるのであるかと疑はれるかも知れないが、子音の轉換はその子音がその種族の口に上らなくなったやうな場合に限られることで、極めて稀なことなのである。アラビヤ語のアルファベートの五つめの字は ǧ であって、これはフォネチク・サインでは dʒ に當るが、もとは g であった。アラビヤ人ももとは g と發音したのであるが、いろいろの理由によって dʒ といふ音に代ったのである。「駱駝」をアラビヤ文語では ǧamal といふが、ヘブライ文語では gamal といふ。アラビヤ語が g といふ音を失ったのは、實に著しい音韻の變化であって、極めて稀にしか起らない現象なのである。

（六）一定の子音とその順序とが單語の內容を決定するといったが、かくのごとき一定の順序に竝べられた子音の群を文法學に於ては語基と名づける。m-l-k とか k-t-b とかいふのが語基である。アラビヤ語の語基の大多數は三つの子音から成り立つ。これを三音式といふ。アラビヤ文字は一字が一子音をきちんとあらはすが故に、またこれを三字式ともいふ。このことはあらゆるセミト語系の言葉に共通する事實である。もっともある語基は二つの子音から成り、二つの子音から成るものは、近い親族關係をあらはす言葉、肉體の各部の名、きはめて手近な意味をあらはす動詞に多いことは考へなくてはならぬ問題である。例へば ʾ-b「父」ʾ-m「母」b-n「息子」ʾ-x「兄弟」j-d「手」d-m「血」s-t「尻」s-m「名」m-ʾ「水」n-r「火」ḳ-l「言ふ」k-n「ある」ǧ-z「戰ふ」f-r「逃げる」等、なほ多くある。今のアラビヤ文法ではこれらの語基をも三子音語基の特別の場合として說くが、それはアラビヤ文法學の擬制であって、學問上からいへば、意味のあることではない。冠詞、代名詞、その外形式のみをあらはす單語、すなはち代名詞的の陪詞及び副詞、それから前置詞、接續詞の類の語基は二つの子音から成るものが甚多いのであるが、これも大いに考ふべきことと思ふ。冠詞は元來は h-l を語基とし、中に a の母音を入れて hal といふのであるが、今のアラビヤ語では第一の根たる h が ʾ となって ʾal となり、それが名詞の前に置かれるとき、もしその名詞が t θ d ð r z s š ṣ ḍ ṭ ẓ l n、アラビヤ文法學にいはゆる日性文字（ʾalḥurūfu-ššamsījatu）の一つにはじまるならば、冠詞の l が變じて、名詞のはじめにあるその日性文字に代ることになってゐる。ʾ ǧ b ḥ x ʿ ġ f ḳ k m h w j には冠詞の l を同化する力がなく、アラビヤ文法學はこれらの文字を月性文字（ʾalḥurūfu-lḳamarījatu）と呼ぶ。ヘブライ語に於ては冠詞の h の音は保存せられるが、その l はつぎに來る名詞の語頭の子音と、いかなる場合にも同化して、ha のつ

ぎにその子音が重複することになる。つまりヘブライ語には日性文字、月性文字の區別はないのである。冠詞はヘブライ語ではhを存し、アラビヤ語では，に代はるのであるが、hの方が根本的のものであることは明白である。その說明は長くなるから、こゝには省略する。このhは或は冠詞としては主たる部分ではなく、ða という代名詞及び代陪詞に、はっきりさせるために添へて、haða とするのと同じ例で、たゞlだけでは、はっきりしないから、前に ha- を置いてこれを補ふといふのかも知れない。さうすると、この冠詞の語基は h-l ではなく、lといふことになる。このlはaの母音を附けて la とすれば、「實に」といふ意味をあらはす副詞になるのであって、いかにも冠詞の語基たるにふさはしいと思はれるのである。果して然らば、アラビヤ語に於てはそのエッセンシャル・パートたるlが日性文字の前では消え失せ、ヘブライ語に於てはそれがいかなる文字の前でも消え失せる。いかなる場合にでも消えてしまふとは、あまりに甚しいやうに思はれる。副詞とか、前置詞とか、接續詞とかいふものには二つの子音の語基から成るものが多い。kad「すでに」bal「むしろ」'iδ「さて」'inna「誠に」'in「もしも」'an「から」min「から」ma'a「とともに」lam「べからず」hal「か」の類である。一つの子音を以てある意味をあらはすものは、アラビヤ文法學に於ては、これを獨立の單語をなすものと考へず、他の單語に添へてその用をなすものと考へる習慣があり、從って書くにも、その關係するところの單語に附けて書き、言ふにも、その單語と一氣に言ふのである。いはば語助の形で、アラビヤ文法學に於ては、かくのごときものを單に字（harf）と呼んでゐるが、別の國語ならば、立派に獨立の單語として取扱はれるであらうと思はれるものが少くない。前置詞には bi-「を以て」wa-「にかけて」ta-「にかけて」li-「のために」ka-「のやうに」があり、副詞には 'a-「か」la-「實に」sa-「やがて」があり、接續詞には wa-「そし

て」fa-「それから」がある。

（七）アラビヤ語では複合語をつくることができない。例へばドイツ語などでは、augenkrank「眼を病める」といひ、Augenkrankheit「眼の病（やまひ）」といふやうな言ひ方があるが、アラビヤ語では、「眼」といふ名詞を生格にして、それを「病める」といふ陪詞、「病」といふ名詞の後に置き、連語の形を以て言ひあらはすより外はないのである。「眼を病める」は marīḍu-l'aini「眼の病」は maraḍu-l'aini といふ。'aini は 'ain「眼」といふ名詞の生格の形、marīḍu は「病める」といふ陪詞、maraḍu は「病」といふ名詞の、いづれも名格の形である。「眼の病」を maraḍu-l'aini といふのは、日本語にもある言ひ方で、珍らしくもないが、「眼を病める」を marīḍu-l'aini といふに至っては、全くアラビヤ語の獨特な言葉遣であるから、注意を要する。「病んでゐる」marīḍ といふ陪詞のつぎに「眼」といふ名詞の生格の形 'al-aini を置いて、それで「眼を病んでゐる」といふ意味をあらはすのであるから、注意を要するのである。marīḍ といふ陪詞を「病氣がある」と譯せば、それに「眼」といふ名詞の生格の形 'al'aini「眼の」を添へても、marīḍu-l'aini「眼の病氣がある」となって、アラビヤ語の言葉遣に似て來るから、わかり易からう。この言ひ廻しは日本語に於ても「色の黒い男」とか、「鼻の長い獸」とかいふやうな場合には常にあらはれるのである。なほ九州地方には、標準語で「象は鼻が長い」といふところを、「象は鼻の長い」といふ習慣があることを考へ合せるがいゝ。生格とこれを受けるものとの關係をアラビヤ語では 'iḍāfa(t)「結合」といひ、生格をうけるものを muḍāf「結び附けられるもの」生格を muḍāf 'ilaihi「結び附けられる目的（めあて）のもの」といふ。muḍāf と muḍāf 'ilaihi とは、アラビヤ語に於ては、前者が決して冠詞を取らず、語尾の -n を發音しないといふだけであるが、ヘブライ語などにな

ると、前者は著しく母音を短くして、殆んど獨立の單語たる資格のないもののやうになってしまふ。ヘブライ文法では、かくのごとき形を Status constructus（構成體）と呼ぶ。例へば bêθ josēφ「ヨセフの家」に於ける bêθ のごときものが、いはゆる Status constructus なのである。「家」といふ言葉は、かういふ場合の外には、bajiθ といはれ、この bajiθ といふ形は、ヘブライ文法では Status absolutus と呼んで、前の形と區別するのである。なほ bêθ-ēl「神宮」なども同じ趣で、一口にいひ、恰も一つの單語であるかのやうに取扱はれる。ben-melex「王子」なども同じ趣である。ヘブライ語がかやうな姿をなすに至ったのは、早くから格語尾が失はれたためであらうといはれる。動詞にあっても、ドイツ語などでは kommen「來る」といふ言葉を別の言葉と組み立てて、einkommen「入る」「金錢が入る」auskommen「出る」「糊口する」aufkommen「起きる」「榮える」unterkommen「泊めてもらふ」vorkommen「存在する」「起る」nachkommen「續く」überkommen「得る」「占領する」niederkommen「下り來る」「分娩する」umkommen「生命を失ふ」wiederkommen「歸る」zurückkommen「歸る」「返還する」zukommen「接近する」「手に入る」abkommen「去る」「迷ふ」ankommen「到著する」beikommen「迫る」「思ひつく」entgegenkommen「出迎へる」「折れ合ふ」hinkommen「偶然に著く」hinzukommen「近づく」herkommen「由來する」hereinkommen「入る」herauskommen「出る」hineinkommen「はいって行く」hinauskommen「出て來る」mitkommen「一所に來る」wegkommen「去る」などといふやうに、頗る豐富に新らしい意味が作られるのであるが、さういふことはアラビヤ語に求めることはできない。況んや bekommen「得る」entkommen「逃れる」verkommen「衰へる」といふがごとき構造に於てをや。アラビヤ語ではドイツ語の kommen の意味をあらはすのに 'ata もしくは ğā'a

といふ言葉を以てするのであるが、einkommen「金が入る」といふ意味をあらはすには waṣala、auskommen「活計を立てる」といふ意味をあらはすには ʻāšā、aufkommen「榮える」といふ意味をあらはすには nahaḍa、unterkommen「泊めてもらふ」といふ意味をあらはすには 'awā、vorkommen「起る」といふ意味をあらはすには taḳaddama、nachkommen「續く」といふ意味をあらはすには tabiʻa、überkommen「占領する」といふ意味をあらはすには 'istaulā、niederkommen「分娩する」といふ意味をあらはすには walada、umkommen「生命を失ふ」といふ意味をあらはすには halaka、wiederkommen「歸る」といふ意味をあらはすには raǧaʻa、zurückkommen「歸る」といふ意味をあらはすには raǧaʻa、zukommen「接近する」といふ意味をあらはすには lāḳa、zukommen「手に入る」といふ意味をあらはすには waṣala、abkommen「去る」といふ意味をあらはすには 'ittafaḳa、ankommen「到着する」といふ意味をあらはすには waṣala、beikommen「迫る」といふ意味をあらはすには 'iḳtaraba、entgegenkommen「出迎へる」といふ意味をあらはすには ḳābala、hinkommen「偶然に著く」といふ意味をあらはすには waṣala、hinzukommen「近づく」といふ意味をあらはすには 'uḍīfa、herkommen「由來する」といふ意味をあらはすには našaʼa、hereinkommen「入る」といふ意味をあらはすには daxara、herauskommen「出る」といふ意味をあらはすには xaraǧa、hineinkommen「はいって行く」といふ意味をあらはすには daxala、hineinkommen「出て來る」といふ意味をあらはすには xaraǧa、mitkommen「一所に來る」といふ意味をあらはすには rāḳafa、wegkommen「去る」といふ意味をあらはすには 'inṣarafa、bekommen「得る」といふ意味をあらはすには 'istalama, 'axaδa、entkommen「逃れる」といふ意味をあらはすには naǧā、verkommen「衰へる」といふ意味をあらはすには haraka と

いふやうに、それぞれ全く異なる語基を用ゐるのである。

（八）アラビヤ語に於ては語基から名詞・動詞の形式を作ることはたやすいけれども、陪詞・副詞を作ることは難い。例へば k-b-r といふ語基でも、kibr といへば、「大」「誇り」を意味し、kibar といへば、「大」または「老年」を意味し、kabura といへば、「大きい」「生長する」kabīr といへば、「大きい」これは陪詞の形式であるが、これからは副詞の形式はできないのである。k-t-b を取って見ると、kitāb「本」kutubîj「本屋」kitaba(t)「碑記」kātib「書く人」などといふ名詞ができ、kataba「書く」kattaba「隊をつくる」kātaba「文通する」aktaba「口授して書かす」takattaba「隊に分ける」takātaba「互に文通する」'inkataba「書き入れる」'istaktaba「書くことを願ふ」といふやうな動詞はできるけれども、この語基からは陪詞の形式はできず、陪詞の形式もできない。かるが故に、副詞の代りに名詞の役格の形や、名詞に前置詞をつけたものが用ゐられる。jauman は「日」の役格の形で、ドイツ語でいへば eines Tages の意味、lailan は「夜」の役格の形で、ドイツ語でいへば eines Nachts (!) の意味である。ドイツ語でも einer Nacht といはないところに考へさせられるものがある。陪詞からでも同じやうに役格の形を副詞として用ゐることが行はれるのである。ḳalīlan「少しく」kaθīlan「多く」。また bil-kafājati「充分に」li-ðalika「それがために」li-ṭībati-exāṭiri「好んで」のごときは、前置詞を伴ふものの例である。陪詞の形はできがたいから、物主代名詞といふものもなく、たゞ物の所有主を示す後綴がある。kitābī「私の本」kitābuka「貴君の本」kitābuki「貴女の本」kitābuhu「彼の本」kitābuha「彼女の本」kitābukumā「貴君等二人の本」「貴女等二人の本」kitābuhumā「彼等二人の本」「彼女等二人の本」kitābunā「私共の本」kitābukum「貴君等の本」kitābukunna「貴女等の本」kitābu-

hum「彼等の本」kitābuhunna「彼女等の本」といふやうになる。この後綴は動詞にくっついて、その動詞の要する目的を示す。これはアラビヤ語の特色の一つであって、セミト諸語に共通することである。例へば ḍaraba「彼が打った」といふ動詞にこれらの後綴がくっついて、ḍarabanī「彼が私を打った」ḍarabaka「彼が貴君を打った」ḍarabaki「彼が貴女を打った」ḍarabahu「彼が彼を打った」ḍarabahā「彼が彼女を打った」ḍarabakumā「彼が貴君等二人を打った」ḍarabahumā「彼が彼等二人を打った」ḍarabanā「彼が私共を打った」ḍarabakum「彼が貴君等を打った」ḍarabakunna「彼が貴女等を打った」ḍarabahum「彼が彼等を打った」ḍarabahunna「彼が彼女等を打った」といふやうになるのである。

（九）複合語を作ることはできないけれども、一つの語基を擴張して、それに關係のあるさまざまの意趣をあらはすことができ、しかもそれが極めて豊富にできるのである。xubz「パン」といふ言葉の二つめの子音を重ね、母音を代へて、xubbāz とすれば、「パンを燒く人」といふ意味になり、falḥ「鋤」といふ言葉から同様の方法で fallāḥ「鋤を用ゐる人」すなはち「農夫」といふ言葉を作る。また kabīr「大きい」といふ言葉の形を代へて ʾakbar とすれば、「もっと大きい」といふ意味になる。kitāb「本」といふ言葉から kutub「多くの本」といふ言葉を作り、kalb「犬」といふ言葉から kilāb「多くの犬」といふ言葉を作り、kātib「書く人」といふ言葉から kuttāb「多くの書く人」といふ言葉を作るのも、また語基の擴張である。動詞に至っては、さらに驚くべきものがある。例へば kataba「書く」といふ言葉は kattaba「書かす」「隊に分れる」kātaba「文通する」ʾaktaba「口授して書かす」takattaba「隊を分ける」「帶をしめる」takātaba「互に文通する」ʾiktataba「記入する」「豫約する」ʾistaktaba「書くことを願ふ」といふ

形に於ける -na といふ語尾が女性名詞の古い語尾であるのによっても考へられることであって、元來は名詞たる性質を充分にもってゐたのである。完了しない動作をいふ jaktubu といふ形は動詞の形式であつて、これには法をあらはす形がある。アラビヤ語で區別される法は三つ、第一は jaktubu といふ形で、すなほに「彼が書く」といふことをあらはすもの、第二は jaktuba といふ形で、「彼が書くことを」といふ氣持をあらはすもの、第三は jaktub といふ形で、「彼書くべし」といふことをあらはすものである。なほこの第三の形から人稱を示す前綴を取り除けると、ktub といふ形ができるが、語頭に複合子音をいふことのできないアラビヤ人は、はじめに ʼu- を添へて ʼuktub といふ、これは「書け」といふ命令をあらはすものであって、文法上からいへば、第三の形の變ったものである。

（十）名詞文と動詞文との區別が嚴重であることも、特色の一つである。Zaidun waladun「ザイドは男兒である」といふ文は、「ザイド」について述べるものであって、「ザイド」を主語、「男兒」を客語といふ。Zaidun kātibun「ザイドが書いてゐる」といふ文も、kātibun といふ言葉が「書いてゐる人」といふ名詞であるから、アラビヤ人の心持では、「ザイドは書いてゐる人である」といふことであって、前の例とえらぶところがない。かくのごとき文をアラビヤ文法學では名詞文といふ。名詞文は主語たる名詞にはじまり、客語たる名詞がこれにつゞくのが本則である。動作をいふには動詞をはじめに置いて文を作る。動詞の定法の形にはつねに主語が含まれるからである。例へば jaktubu Zaidun「ザイドが書く」のごとくである。jaktubu といふ動詞の形の中にはその動作の主體が第三人稱單數男性のものなることが含まれてゐて、これ一つだけで、「彼が書く」といふことになり、それで立派に一つの文をなす、そのつぎに Zaidun といふ言葉を置くのは、書くところの第三人稱單數男性のものが、「ザイド」といふ名なることを特

に示すに過ぎない。故に「彼が書く。それはザイドである」といふ趣になる。jaktubu-lwaladu「男兒が書く」でも、同じく「彼が書く、それは男兒である」といふ氣持である。かくのごとき文をアラビヤ文法學では動詞文といふ。前にある動詞を述語といひ、後なる名詞を行爲者といふ。

（十一）文章法上に生格について、數詞について、述語たる動詞と行爲者たる名詞との關係について、獨特な規則があることも見逃しがたい。

生格については、muḍāf と muḍāf ʾilaihi とは一體をなして、いかなる場合にもその間に別（ほか）の語を介在せしめざるが故に、例へば、「少女の兩手と兩足」といはんとするには、jadā-lbinti wariǧlāha「少女の兩手とそして彼女の兩足」といはねばならぬ。また muḍāf にかゝる陪詞は muḍāf ʾilaihi の後に置かねばならぬ。baitu-lwazīri-lwāsiʿu「大官の廣い家」に於て、wāsiʿ「廣い」は wazir「大官」のつぎに置かれるのである。

數詞については獨特なものがある。數を示す單語にして陪詞なのは wāhid, 女性 wāhida(t)「一」及び ʾiθnāni, 女性 ʾiθnatāni「二」だけで、その外はみな名詞である。（「一」にも ʾaḥadun といふ名詞がある。「三」より上の數は、もと特別の語尾のないのが用ゐられたが、後に至って女性の語尾を取る形ができ、この女性の語尾のある形が多く用ゐらるゝこととなり、これが男性名詞とともに用ゐられ、女性の語尾のない形が女性名詞とともに用ゐられるやうになった。數詞を名詞とともに用ゆる法は、アラビヤ語にあっては、三から十まではその下に複數生格の名詞を取り、十一から九十九まではその下に單數役格の名詞を取り、百以上は單數生格の名詞を取る。ヘブライ語にあっては「一」をあらはす ʾehāð 女性 ʾahaθ だけが名詞として Status constructus の形を取って下に名詞をうけてもよく、陪詞と

して名詞のあとに置いてもいゝことになってゐるだけで、外はみんな名詞で、Status constructus の形を取り、二から十までは下に複數名詞を取り、十一から十九までは複數名詞を下に取ることが多いが、ある語は必ず單數にするといふことがあり、二十以上も同じやうにする。ゲエズ語では三より上の數も陪詞として用ゐられるやうになってゐるが、女性の語尾のあるものが男性名詞とともに用ゐられ、女性の語尾のないものが女性名詞とともに用ゐられるといふ趣は同じやうである。

述語たる動詞と行爲者を示す名詞との關係は、行爲者を示す名詞が男性ならば、單數たると、兩數たると、複數たるとを問はず、述語たる動詞をすべて三人稱單數男性とし、女性ならば、述語たる動詞の直後にあるときにかぎり、その單數たると、兩數たると、複數たるとを問はず、述語たる動詞をすべて三人稱單數女性とし、もし述語たる動詞と行爲者を示す名詞との間に別の單語が介在するならば、述語たる動詞は三人稱單數男性でも、同女性でもいゝとする。また文の中などで、行爲者たる名詞が述語たる動詞の前にある場合には、述語たる動詞はその名詞に性數に於て一致せねばならぬ。故に行爲者を示す名詞と述語たる動詞との間には必ずしも congruentia がないのである。名詞と陪詞との關係に於ても、單數の男性又は女性の名詞のつぎには陪詞が一致し、兩數の男性又は女性の名詞のつぎにも陪詞が一致し、語尾によって複數たることを示す複數男性名詞のつぎには陪詞が一致し、ことに人を示すものには必ずさうせねばならぬとせられ、語尾によって複數たることを示す複數女性名詞のつぎには陪詞は單數女性となるのが普通で、人を示すものにかぎり、複數にしてもよしとせられ、母音を變へて多數の意味をあらはした名詞のつぎには陪詞は單數女性とする、たゞし人を示すものは複數にしてもいゝとする。

（十二）文と文とを結ぶには parataktisch であるのが普通であり、hypotaktisch であるのはまれである。hypotaktisch の方法が發達しないことは、特色とすべきものである。二つの文章を結ぶに wa-「そして」を以てするもの、fa-「それから」を以てするものが最も多い。古典的なアラビヤ文を讀むと、殆んど初から終まで wa- と fa- とで連絡してゐることが強く感ぜられる。コラーンの中にはその例が多い。元來 wa- は物事がたゞ相竝ぶことをあらはし、fa- は二つの事が相次いで起ることをあらはす言葉であるが、動詞文のつぎに wa- で始まる名詞文を置くと、前の文にいふところの動作が起ったとき、後の文にいふところの狀態であったことを示すことができる。二つの動詞文を竝べて、同じ趣を示さうとするには、この wa- さへも入れない。これを狀態文といって、アラビヤ文法學では格段なあらはれとして取扱ふのである。この wa- とか fa- とかいふものは、この外にもいろいろの意味に用ゐられる。ひろくセミト諸語を見渡すに、いくらかでも hypotaktisch な方法が發達してゐるのは、まづアラビヤ語ぐらゐなもので、外の言葉にあっても hypotaktisch なものがないではなく、名詞句を誘導するところの、アラビヤ語でいへば ʾan に當るものが、アッカド語にも、ヘブライ語にも、フォイニケー語にも、アラマイ語にも存するのである。なほ關係文章はこれを誘導する關係代名詞とともに、はやくから用ゐられてゐる。ヘブライ語に waw consecutivus といふものがある。これは完了體の動詞の文のつぎに waw を置いて、未完了體の動詞を置くと、この未完了體の動詞は未完了をあらはさないで、前の完了體の動詞のあらはす動作の繼續たる完了せる動作をあらはすのである。ヘブライ語では未完了體の語尾の母音が脫ち去つたために、法をあらはすことが周匝でなく、かやうに waw とともに用ゐられる未完了體も、見たところでは普通の未完了體の形であるが、その淵源に遡って見ると、かゝる場合の未完了體は必ず短

い形であって、アラビヤ語でいへば muḍāriʿ maǧzūm (modus apocopatus) といふものに當るのである。この語法はヘブライ語にのみ存し、別のセミト語に全く存せざるところであるが、實はこれがセミト語のもとの形であって、それがたまたまヘブライ語に殘り、別のセミト語には失はれたのである。アラビヤ語に於て muḍāriʿ maǧzūm は命令に近い意趣をあらはすのであるが、lam といふ否定をあらはす副詞とともに用ゐると、單なる完了の否定をあらはすことになってゐるのも、よく考へて見ると、ヘブライ語に殘ってゐる waw consecutivus と同じ趣のものであることが知れるのである。ヘブライ語の waw consecutivus は古いセミト語の動詞の二つの時の作用の名殘ともいふべきものである。ヘブライ語の敍述文では、述語たる動詞は始の一つだけが完了體で、その外は waw を戴く未完了體であるのが普通である。舊約書創世紀第一章の文などがそのいゝ例である。

セミト語の系圖を明かにしようといふには、エジプト語、アッカド語、ヘブライ語、フォイニケー語、アラマイ語、アラビヤ語の六つを充分に調査するのが第一歩である。なほこの外にゲエズ語を加へれば、もっといゝ。といふのは、このゲエズ語はアラビヤ語の南派を代表するものであるが、その南派といふものは、北派すなはち普通にいふアラビヤ語とかなりのへだたりがあるがゆゑに、これを明かにしなければ、廣い意味のアラビヤ語の性質がはっきりしないからである。

セミト語を大づかみに分ければ、エジプト語、アッカド語、ヘブライ語、フォイニケー語、アラマイ語、アラビヤ

語の六つの群になる。この中、エジプト語、アッカド語、ヘブライ語、フォイニケー語の四大群はすでに死滅し、アラマイ語の群も僅かに命脈を存するに止まり、アラビヤ語の群だけがひとり活力を示してゐるのである。

アラマイ語群

新東アラマイ語〇クルヂスターン、アゼルベイジャンにすむアラマイ人の言葉、ウルミヤ方言はその代表的なもの

新西アラマイ語〇新シリヤ語ともいふ、ダマスクに近いアンティリバノス山脈中の三村落に行はれる言葉、マアルーラ方言

アラビヤ語群

新北アラビヤ語〇普通にいふ新アラビヤ語

アラビヤ半島の方言

イラークの方言

シリヤ、パレスチナの方言

エジプトの方言

マグレブの方言〇リビヤ、チュニス及びアルゼリヤ、モロッコの四つに分れる。

マルタ島の方言

新南アラビヤ語〇新アビシニヤ語

アムハラ語

チグレー語

デグリニャ語
メフリ方言〇ハドラマウトの東端マフラの地に行はれる
シフル方言〇オマーンの西南境の地に行はれる
ソコトラ島の方言

ついでにいふ、ヘブライ語は、學術上宗教上の言葉としてのほかは、一旦死滅したのであるが、近く起ったシオニスムスの運動によって、復活が試みられ、學術上宗教上の目的の外に有志者の間には社交上儀式上にも用ゐられることになった。しかしながら古代ヘブライ語を用ゐようといふのではなく、中世ヘブライ語を本とし、それに新アラマイ語を多分に取り入れたものであることが、シオニストの發行した新聞や雜誌などの文からでも看取されるのである。

セミト語を通覽するに、エジプト語はいろいろの點、ことに語彙に於て著しく爾餘のセミト語と異なるところがあるので、別の系統の言葉であるかのごとく思はれ來ったのであるが、アドルフ・エルマンの永年にわたる研究によって、たしかにセミト語であることが明かになった。エルマンの說によれば、エジプト語はセミト語の中で甚だ早く分離して、數千年の間全く單獨に發達したものであらう、ニール河の流域に移住したセミト人の言葉は、古くからその地にあって異なる言葉を使ってゐた民との混合により、また極めて古くから文化の發達したことによって、爾餘のセミト語と異なる姿を取るに至ったもので、その趣は英語が爾餘のゲルマン語と異なる姿を取るやうになったのによく似てゐるといふ。アッカド語、ヘブライ語、フォイニケー語、アラマイ語、アラビヤ語の五つは極めてよく似た姿を

示すが、しかも大きい特徴によって、はっきり二つの派に分けることができる。その特徴の最も著しいものをいへば、第一、音に於て甲種の言葉では元來のθがšにかはり、元來のδがzに代ってゐるのに、乙種の言葉では元來のθはそのまゝθであり、元來のδはそのまゝδであるといふ事實、第二、文章を結び合せるには waw consecutivus が甲種の言葉では最も多く用ゐられる方法であるのに、乙種の言葉では或るものはすでにその方法を失ひ、そのなほ存するものもたゞ僅かに痕跡を留めるだけであるといふ事實、第三、語彙にあっては、例へば「ある」とか、「なす」とかいふやうな常に用ゐられる動詞が甲種の言葉と乙種の言葉とでは全く異なるのである。二派を分つ線はヘブライ語とフォイニケー語との間に引かれる。ヘブライ語とフォイニケー語とは極めてよく似てゐるから、セミト學が進歩してからも、久しい間カナアン派の言葉として一括され來ったもので、西暦一千八百八十七年にテオドル・ネルデケが「セミト語」といふ概說を著したころはいふに及ばず、それより三十二年めの西暦一千九百十八年に出たゴトヘルフ・ベルクストレーセル改訂の「ゲゼニウス」の初巻にも、なほヘブライ語とフォイニケー語とをカナアン派の言葉としてある。ヘブライ語が甲種の言葉であり、フォイニケー語が乙種の言葉であることを明かにしたのは、西暦一千九百二十二年に出たハンス・バウエル及びポントゥス・レアンデルの「舊約書のヘブライ語の歴史的文法」の第一巻である。上に述べた三つの點についても、「牡牛」をヘブライ語では šōr といひ、アッカド語で šūru といふのに近く、フォイニケー語では θōr といって、アラビヤ語で θaur といふのに近いし、waw consecutivus にしても、ヘブライ語では殆んどこれより外に文と文とを結び合せる方法がないかのごとき觀念を示すのに、フォイニケー語ではこれが全く見えないし、また「ある」とか、「なす」とかいふやうな單語にしても、ヘブライ語では「ある」を hājā「なす」を

デグリニャ語
メフリ方言○ハドラマウトの東端マフラの地に行はれる
シフル方言○オマーンの西南境の地に行はれる
ソコトラ島の方言

ついでにいふ、ヘブライ語は、學術上宗教上の言葉としてのほかは、一旦死滅したのであるが、近く起ったシオニスムスの運動によって、復活が試みられ、學術上宗教上の目的の外に有志者の間には社交上儀式上にも用ゐられることになった。しかしながら古代ヘブライ語を用ゐようといふのではなく、中世ヘブライ語を本とし、それに新アラマイ語を多分に取り入れたものであることが、シオニストの發行した新聞や雜誌などの文からでも看取されるのである。

セミト語を通覽するに、エジプト語はいろいろの點、ことに語彙に於て著しく爾餘のセミト語と異なるところがあるので、別の系統の言葉であるかのごとく思はれ來ったのであるが、アドルフ・エルマンの永年にわたる研究によって、たしかにセミト語であることが明かになった。エルマンの說によれば、エジプト語はセミト語の中で甚だ早く分離して、數千年の間全く單獨に發達したものであらう、ニール河の流域に移住したセミト人の言葉は、古くからその地にあって異なる言葉を使ってゐた民との混合により、また極めて古くから文化の發達したことによって、爾餘のセミト語と異なる姿を取るに至ったもので、その趣は英語が爾餘のゲルマン語と異なる姿を取るやうになったのによく似てゐるといふ。アッカド語、ヘブライ語、フォイニケー語、アラマイ語、アラビヤ語の五つは極めてよく似た姿を

示すが、しかも大きい特徴によって、はっきり二つの派に分けることができる。その特徴の最も著しいものをいへば、第一、音に於て甲種の言葉では元來のθがšにかはり、元來のðがzに代ってゐるのに、乙種の言葉では元來のθはそのまゝθであり、元來のðはそのまゝðであるといふ事實、第二、文章を結び合せるには waw consecutivus が甲種の言葉では最も多く用ゐられる方法であるのに、乙種の言葉では或るものはすでにその方法を失ひ、そのなほ存するものもたゞ僅かに痕跡を留めるだけであるといふ事實、第三、語彙にあっては、例へば「ある」とか、「なす」とかいふやうな常に用ゐられる動詞が甲種の言葉と乙種の言葉とでは全く異なるのである。二派を分つ線はヘブライ語とフォイニケー語との間に引かれる。ヘブライ語とフォイニケー語とは極めてよく似てゐるから、セミト學が進歩してからも、久しい間カナアン派の言葉として一括され來ったもので、西暦一千八百八十七年にテオドル・ネルデケが「セミト語」といふ概説を著したころはいふに及ばず、それより三十二年めの西暦一千九百十八年に出たゴトヘルフ・ベルクストレーセル改訂の「ゲゼニウス」の初巻にも、なほヘブライ語とフォイニケー語とをカナアン派の言葉としてある。ヘブライ語が甲種の言葉であり、フォイニケー語が乙種の言葉であることを明かにしたのは、西暦一千九百二十二年に出たハンス・バウエル及びポントゥス・レアンデルの「舊約書のヘブライ語の歴史的文法」の第一巻である。上に述べた三つの點についても、「牡牛」をヘブライ語では šōr といひ、アッカド語で šūru といふのに近く、フォイニケー語では θōr といって、アラビヤ語で θaur といふのに近いし、waw consecutivus にしても、ヘブライ語では殆んどこれより外に文と文とを結び合せる方法がないかのごとき觀念を示すのに、フォイニケー語ではこれが全く見えないし、また「ある」とか、「なす」とかいふやうな單語にしても、ヘブライ語では「ある」を hājā「なす」を

ʿāsā といふが、フォイニケー語では「ある」を kn「なす」を pʿl といって、相異なり、フォイニケー語の kn はアラビヤ語の kāna またフォイニケー語の pʿl はアラビヤ語の faʿala と合ふのである。（初學者のためにいふ、フォイニケー語の動詞に母音を附けないのは、プラウトゥスの「ポエヌルス」も今は手許にないので、まちがふといけないから、子音だけを示したのである。）ヘブライ語とフォイニケー語との間に引かれる線によって分たれる二派の言葉は、ヘブライ語の屬する甲種のものを古派とし、フォイニケー語の屬する乙種のものを新派とする。古派にはヘブライ語、アッカド語が數へられ、新派にはフォイニケー語、アラマイ語、アラビヤ語が數へられる。この系屬を明かにするのは、バウエル及びレアンデルの前にいつた書の第十七頁にある圖が最も便利である。

つぎにセミト語族の一つ一つの派について一言しよう。エジプト語は少くとも西曆紀元前三千四百年頃から西曆紀元前百年頃に至るまで凡そ三千年以上に亙る歷史をもつ言葉である。從って古いところと新らしいところとには語彙の上にも、文法の上にも相違があり、大體古エジプト語、中エジプト語、新エジプト語の三つに分けられるやうである。この言葉の繼續をコプト語といひ、ブハイラの方言とサイードの方言とに分れる。西曆第七世紀よりアラビヤ語の壓迫によってやうやくその用が蹙まったが、それでも西曆第十五世紀まではエジプトのキリスト教徒の間に一般に行はれた。西曆第十七世紀に至っては宗教上の目的にしか用ゐられなくなった。アッカド語はもとはアッシリヤ語と呼ばれたもので、さう呼ばれたのは、この言葉の研究がアッスルの文獻の研究に端を發したからであるが、その後この學が開けて、バビロンの文獻が主體をなすやうになってからも、古い名稱はすたらず、今もなほこれをアッシリヤ語と呼ぶ人が少くないが、學界ではアッカド語といふ名でいふのが普通になった。この言葉は少くとも西曆紀元前三

千年頃から西暦紀元前三百年頃までざっと二千七百年以上の歴史をもってゐる。概していへば、バビロン語、アッスル語、新バビロン語の三つに分れ、文字も、語彙も大いに異なる。バビロン語にはシュメル語の影響が多く、アッスル語にはハッチ語の影響が多く、新バビロン語にはまた別の夾雜分子が認められる。この言葉も、早くから別のセミト語と離れて獨立に發達したものである。この言葉が威勢を張ったのは西暦紀元前第十五世紀頃から數百年の間であつた。かのテル・エル・アマルナの消息集はこの事實を示すものである。ヘブライ語の古さは西暦紀元前第十五世紀までとにかく立證される。テル・エル・アマルナの消息集の中にカナアンの言葉といふのがそれである。西暦紀元前一千二百五十年頃に成つたデボラの歌（舊約書士師記第五章）がそれに次ぐ。西暦紀元前第九世紀以來文字上の遺存がある。方言の差はあったらしく、その痕蹟は舊約書にも見える（士師記第十二章第六節）。ユダヤ人のバビロン幽屛後にはバビロンの地にその頃專ら行はれたアラマイ語の影響を受けて、故郷に歸ってからも、よほど言葉遣が變った。これが中ヘブライ語である。新ヘブライ語といふのは最近に至ってシオニストの努力によって復活したものである。ヘブライ語はカナアンの地に隨分古くから行はれたセミト語であるが、最初にこの言葉を用ゐてゐたものがどういふものであるかはよくわからない。後にこの地にはいって來た別種のセミト人がつねにこの地に於てこの言葉を習得して、專らこの言葉を使用するやうになったことは、特に注意すべきところである。古くはアモリト人、やゝ新らしくはハビリ人、みなこれ固有の言葉を捨てて、ヘブライ語を用ゐるやうになったものである。ヘブライ人はこのハビリ人と連絡があるものらしく、もとアラマイ語を用ゐてゐたといはれ、カナアンの地に入るに及んで、はじめてヘブライ語に習ひ、專らこれを用ゐるやうになったものである。ヘブライの神 JHWH のごときも、ヘブライ語では

説明がつかず、アラマイ語か、アラビヤ語かならば、充分説明がつくのである。假にアラビヤ語で解釋すれば、hawā, jahwī「落ちる」、「襲ひかゝる」、「風が吹く」などといふ意味の動詞に本づくものらしく、これによれば、暴風の神であつたのではないかといふ見當がつく。ヘブライ人の住んだ地に多い rāma といふ名は「岡」といふ意味であるが、これはアラマイ語でなければ、説明がつかない。フォイニケー語の最古の遺存はキュプロス島のキチオンから出た青銅盤の破片で、西暦紀元前九百五十年頃のものと認められる。アンチオキヤの北、今のジンリルリの地から出たヤウディ王 KLMW の碑がこれに次ぐ。これは西暦紀元前八百五十年頃のものと認められる。そのつぎがゲバルの寄進碑で、これは西暦紀元前第五世紀のものと認められ、全文十五行から成り、豐富な内容をもつ。シドン王エシュムナザルの墓誌は内容の上から見て頗る重要である。フォイニケー語は西暦紀元前一世紀頃までは生存してゐたらしい。カルタゴに行はれた言葉をポエニ語といふ。ポエニはフォイニケーの訛。この言葉は多くの碑文、古泉によつて殘る。碑文の中で注意すべきはマルセイユにある犧牲の制札である。プラウトゥスのポエヌルスの中にも多く保存せられる。ポエヌルスはポエニ語を寫すのにラテン文字を以てしたから、種々の點に於て缺陷のあるのを免れないけれども、これがために母音の情態を不充分ながらも知り得るといふ利益もある。カルタゴが滅亡してから後にその地に行はれた言葉を新ポエニ語といふ。この新ポエニ語は頑固に征服者の言葉たるラテン語に抵抗し、周圍に住んでゐたものの言葉で、やゝもすれば勢よく入り來つて、その權利を主張せんとするマウリタニヤ語にも抵抗して、およそ西暦紀元第五世紀頃まで生存した。アラマイ語の最古の遺存は西暦紀元前七百五十年から七百二十年までの間に成つたといはれる。ジンリルリで發見されたサムアルの古碑である。パナムモ王、バルレクブ王、ハマート及び Lʿš の王 Zmr の碑は

いづれも西暦紀元前八世紀のものである。アラマイ人は西暦紀元前第十四世紀からその名があらはれてゐるが、はじめフォイニケー文字を借り用ゐ、それとともにフォイニケー語を文章語として用ゐたもので、專ら本國の言葉を記すやうになったのはやゝ後のことである。アラマイ語はアッシリヤ帝國内に勢を張り、全帝國内に行はれるやうになり、つひにはアッカド語を人の口から追ひ拂ったが、ペルシャ王國が起るに至っても、その勢が毫も衰へず、世界の交通語となり、その頃まで西方に行はれた種々の言語の特權を奪った、セミト人の住むこと決して多からざる小アジヤの地に於てさへペルシャのサトラプはその貨幣に銘するにアラマイ語を以てするほどであった。今のアラバスン、古のいはゆるアラビュソスの地に於て發見された一つの碑にはセミト、イーラーン二教を混じた宗法をアラマイ文字アラマイ語で記してゐるが、これを以て見ると、アラマイ語はペルシャ時代に於てこの地方の公用語であったばかりでなく、精神生活を發表する具でもあった。この時代にアラマイ語の勢力はエジプトにも及んで、パピュロスの上にもこの言葉を以て記した法令の類が殘る。アラマイ語はアラビヤ人の住んだ地にもはいったが、こゝでは文章語として一時使用せられたに止まる。後代のアラマイ語は東アラマイ語、西アラマイ語に區別される。東アラマイ語の遺存は西暦紀元後のものがあるだけである。これに屬するものはエデッサの方言を基礎とするシリヤ語、バビロンタルムード中のゲマル部の言葉である。シリヤ語はギリシャ語の影響が多く、バビロンタルムード語はヘブライ語の感化が著しい。バビロンタルムードの一類にマンダイ語がある。これはヘブライ語の影響もなく、ギリシャ語の感化もなく、正字法の上にも他國民の歴史的正字法と何等の交渉がなく、喉音の消滅の著しい實際の音韻組織を忠實に寫してゐるといふ點が、有益な史料である。シリヤ語に二派ある。これは西暦紀元第五世記に於てキリスト教社會を震駭させた

キリスト論によつて、これまで統一してゐたシリヤのキリスト教會が二つの相背反した派に分れたためである。當時ローマ帝國に屬した西方のシリヤ人はヤコブ・バラダイオスの一體論に歸依して、自らヤコブ派といふ。しかるにペルシャ帝國に住んだシリヤ人はネストリウスの教理を奉じてネストリウス派といふ。これよりしてもとは一つであつたシリヤ語が分れて二つとなり、互に通じないやうになつた。西曆第七世紀にアラビヤ人が勃興してシリヤ語の通用を奪つた後はたゞ宗教の用語となり、なほ六百年の間も命脈を存した。東シリヤ語の今日僅かに殘るものが新シリヤ語である。アケメネス朝の時代にペルシャ人はペルシャ語をアラマイ文字で寫しただけでなく、多くのアラマイ語をイデオグラムとして輸入した。音でよめばアラマイ語、それを訓でよめばペルシャ語である。西シリヤ語の遺存は西曆紀元前第五世紀に於けるアスアン・エレファンチンのユダヤ人のアラマイ語でパピュロスに書かれたものと、聖書中のアラマイ語とがそれにつぐ。タルグーム語、イェルサレム・タルムード語、サマリタン語、キリスト教の行はれるパレスチナで用ゐられるアラマイ語がやゝ新らしい形式である。新約書にはすべて十六個のアラマイ語がギリシャ文字で書かれてゐるが、その時代の土人の言葉を明かにすることはできない。パレスチナのキリスト教徒は西曆紀元第三世紀以來エデッサの教會に從屬したが、キリスト論が起つて東方のキリスト教徒が分裂するに及んでは、ビュザンツ皇帝の勅裁を經たハルケドン宗教會議の決議を信奉するメルキト派として獨立し、經典を飜譯し、宗教文學を作つた。この言葉はアラビヤ人が興るに及んで、その跡をひそめた。西アラマイ語の今日に生存するものはダマスクに近いアンティリバノス山中に相隔絶せるマアルーラ外二つの村に話される言葉である。アラビヤ語はアラビヤの地で二つの枝に分れる。一つは

北アラビヤ語、一つは南アラビヤ語である。二つの中では南アラビヤ語の方が早く文化に觸れたが、北アラビヤ語も文明國の近くではペルシャ時代にも、ローマ時代にもその文化に影響せられざるを得なかった。北アラビヤ語を話す民はかやうな事情の下にアラマイ語に習ひ、アラマイ文化を採り、アラマイ語を文章語とするに至ったものが多く、かくのごとき要素をもつ國家も多く成立した。けれども北アラビヤに於てもアラビヤ語をアラビヤ文字で書いたものがないではない。その文字は南アラビヤ文字で、カナアン文字から直接に出たものである。かくのごとき碑文はダマスクから北ヒジャーズのエルオイラに至るまでの地に發見せられる。この文字はやがてアラマイ文字、ことにナバタイ文字によって驅逐せられた。新らしい形式に於ける最古のアラビヤ文獻はダマスクに近いエンネマーラに發見せられたもので、西暦紀元三百二十八年に成立したヒラ王朝の廟陵を飾るものである。この碑文の言葉は後代のアラビヤ文語と殆んど同一である。これに次ぐのがアレッポに近いザバドの西暦五百十二年または五百十三年の碑文、ダマスクの南ハルラーンにあった西暦五百六十三年の碑文である。金石文字はかやうに少いけれども、歌謠が頗る發達してゐて、それが永く國民の口に殘ることとなつた。この歌謠の言葉は專ら歌謠にのみ用ゐられる共通語であって、後の世までアラビヤ人が言語上の理想とするところである。俗語はメッカの方言だけがエルコルアーンの用語の基礎となったことによって知られるが、外の地方の方言は全く知る手がかりがない。中世の俗語といふものも殆んど知ることができない。近代の俗語は前に述べたとほりである。南アラビヤは、西暦紀元前數世紀の頃には、土地が肥沃で、產物が多く、インド貿易の焦點となって、富が集積したので、高度の文化が開け、カナアン人から文字を借りて、カナアン語よりも豐富な音を寫すに適するやうに改造した。南アラビヤ語は北アラビヤ語よりも音が豐富であるが、それ

でも規則的に對應するのである。南アラビヤ語に於ては s ś š の三つが區別せられ、北アラビヤ語に於ては s š の二つが區別せられる。南アラビヤ語はまづマイン語、サバ語の二つに分れる。マイン語は第三人稱の代名詞にも、役幹にも s を用ゐ、この點がアッカド語とよく似てゐるが、サバ語はこれらの場合に h を用ゐ、この點が爾餘のセミト語と一致する。マイン語は商業上の足溜りを經てヒジャーズのエルオイラに移植せられ、また別のところではサバ語と竝んで存する。この外にハドラマウトの言葉を區別すべきもののごとくである。これらの言葉で書かれた碑文はかなり多いが、神社の造營に關するものが多いやうで、解しがたいのは遺憾である。その古いのは西暦紀元前八百年、新らしいのは西暦六百年に及ぶといはれる。これらの言葉はイスラームの興隆とともに北アラビヤ語に壓倒せられて死滅し、マフラ、シフル等の海岸地、ソコトラ島に殘存するのみとなった。この南アラビヤ語に屬するもので、いまなほ勢のあるのは、エチオピヤに行はれる言葉である。エチオピヤといふのは、ギリシャ語では黑人の住む地を指し示し、エジプト語のエクオーシュ、ヘブライ語のクシュに當るのであるが、エジプトではニール河の第一のカタラクトより南にある地の總稱としてこのエクオーシュといふ言葉を用ゐた例であるから、極古い時代からアクスームの諸王がその國を呼ぶセミト語のハバシャ Habaša(t) といふ言葉に代へてこのエチオピヤといふ言葉を用ゐ、そのまゝ今日に及んでゐるにしても、それは決して適當とはいはれず、やはりもとのハバシャの方がぴったりするのである。ハバシャをギリシャ風にしたのがアビュシニヤである。國民は自ら稱してゲエズといひ、國語をも同じくゲエズと呼ぶ。もと南アラビヤから對岸のアフリカに移住したものである。移住の年代ははっきりしないが、西暦紀元前よほど久しいことであるらしい。このものは移住して後その地に古くから住んでゐたハミト人と混合して、いろいろの影響をう

け、言語もまた大なる變化を蒙った。ゲエス語の最も古い遺存は西曆紀元第四世紀に成るものであるが、その文字には母音が附いてゐない。西曆紀元五百年頃に至ると、碑文はやうやくゲエズ文字の特色を示し、古代セミト文字では示さない母音を子音文字と組み合せて書いてある。音韻の情態は北アラビヤ語よりもよほど新らしい。碑文の外に聖書の飜譯があり、キリスト教文學がある。ゲエズ語の生命は長かった。西曆第十二世紀にアクスーム王朝が倒れて、ゲエズ國民は政治上の獨立を失ひ、西曆一千二百七十年から西曆一千八百五十五年までアムハラ種族のサロモン王朝の支配をうけることとなったが、ゲエズ語は存在を失はず、この王朝はアムハラ語を國語としたけれども、文學の用にはつねにゲエズ語が用ゐられたから、ゲエズ文學は却ってこの時に榮えたやうである。ゲエズ語の繼續と見るべきは古い首府アクスームの附近で用ゐられるチグリニャ語、それより遙かに北の方、イタリヤの植民地エリトレヤ竝びにダフラク島に行はれるチグレ語である。チグレ語を話すものはキリスト教を奉ぜず、イスラームを信ずる。ツァナ海の南及び東南地方ではセミト人とハミト人とが混合してしまった。アムハラ種族はアムハラ語をハミト人に强要したが、ハミト人から受けた影響も中々多く、ゲエズ語に似たアムハラ語が音韻にも、語法にも、著しくハミト的色彩を加へ、ことに文章の構造は全くハミト語と異なるところがなくなり、語彙も半數はハミト語を借りるやうになった。アムハラ語の遺存は西曆第十五世紀または第十六世紀に成った軍歌を最古とする。アムハラ文學は大體に於て西曆第十七世紀以後のものである。

アフリカの北部、東は紅海から西は大西洋に至るまでの廣い地域に行はれるハミト語とこのセミト語との間に、どれほどの關係があるかといふことは、どうしてもこゝに一言しなければならぬと思ふ。ハミトといふ名も舊約書創世

記第十章に由來するところで、古くはイギリスのニューマン（西暦一千八百三十年）やゝ後れてはドイツのベンファイ（西暦一千八百四十四年）ロトネル（西暦一千八百六十年）ドイツのレプシウス（西暦一千八百八十年）オーストリヤのフリートリヒ・ミュレル（西暦一千八百八十七年）ドイツのプレートリウス（西暦一千八百九十三年）フランスのバセー（西暦一千八百九十四年）ドイツのマインホーフ（西暦一千九百十二年）イタリヤのトロムベッティ（西暦一千九百二十二年）ドイツのドレクセル（西暦一千九百二十一年乃至一千九百二十五年）フランスのカーン（西暦一千九百二十四年）等の研究によって、ハミト語といふものの本體もやうやく明かになった。大別すれば、リビヤからベルベリー地方へかけて行はれるタマシェクといふ類と、いはゆるエチオピヤの地に廣く行はれるクシト語といふ類とに分れるのであるが、これらの言葉は確かにある程度までセミト語と似たところがある。もとよりセミト語とハミト語との間には多くの深刻な相異があるが、類似もまた著しいので、もしその類似が眞に近緣に基き、轉來に因るものでないとすれば、セミト語とハミト語とは歷史の始まる前すでに久しく分れてゐたもので、ハミト語はかのエジプト語が爾餘のセミト語から分れ出たよりももっとずっと早く分れ出たものと認めざるを得ない譯である。セミト語とハミト語とを一類とし、Chamito-semitisch といふ語系を立てようとする學者も少くないが、それはセミト語とハミト語との間に存する多くの著しい類似を眞に近緣に基くものと見るからである。現今ハミト語學は大いに進んではゐるが、何といってもなほ不充分な點が多い。タマシェクは古代リビヤ語の繼續であるといふ人があっても、何人も積極的に反對することはできない。タマシェクは現在リビヤの地に行はれる言葉であり、古代リビヤ語はその名よりして古代リビヤの地に行はれた言葉であることが認められるから、タマシェクは古代リビヤ語の繼續であるといふの

には少しも無理がない。古代リビヤ語といふものはたゞ固有名詞が殘存するのみで、言葉の性質を明かにすることができないから、タマシェクは古代リビヤ語の繼續であるといっても、その繼續であるといふことを證明する方法はないのである。ハミト語學の缺點は、この語系に屬する言葉の新らしい形式だけしか知ることができないので、歷史を知ることが全く不可能ではないにしても、極めて困難であるといふところにある。現在のところではハミト語系の歷史は暗黑であり、また何時になったら明かになるであらうかといふ見込さへ立たないありさまである。すでに言葉の性質も、歷史もよくわかってゐるセミト語と、まだやっと言葉の性質が明かになっただけで、全く歷史の知れないハミト語とを竝べて、その二つのものの間にどういふ系圖的關係が存するかを研究しようといふのは、甚だ當を得ないと思ふ。多くのセミチストは Chamito-semitisch といふ語系を立てようといふ說に贊成せず、セミチストにして少くともこれを早計なりとして排斥しないものは一人もないといってい〻。

三

今日のペルシャ語は雜糅語であって、その語彙はインドヨーロッパ語と見做されるものと、セミト語と見做されるものとが殆んど半々といふ姿であり、語法に於て、動詞の人稱語尾は單數第一人稱 -am 第二人稱 -i 第三人稱 -, -ad, -ast 複數第一人稱 -im 第二人稱 -id 第三人稱 -and であって、一目見ただけでもわかるやうに、紛ふ方なきインドヨーロッパ語ぶりであるが、生格の名詞を名詞に結び付ける方法は、生格の名詞を後に置き、前の名詞に i の母音を添へてつながりとすること、例へば kitab-i pisar「少年の本」のごとくであるから、むしろアラビヤ文法學にいはゆる

'iḍāfa(t) の構造、もしくはヘブライ語に於ける Status constructus の構造を思はしむるものがあり、また人稱後綴 (Personalsuffixe) といふものがあって、名詞に添へばその領主を示し、動詞に添へばその目的を示すこと、例へば kitābam「私の本」kitābat「あなたの本」kitābaš「彼の本」kitābamān「私共の本」kitābatān「あなた方の本」kitābašān「彼等の本」zadam「彼が私を打った」zadat「彼があなたを打った」zadaš「彼が彼を打った」zadamān「彼が私共を打った」zadatān「彼があなた方を打った」zadašān「彼が彼等を打った」のごとくであるのも、たしかにセミト語の風と思はれる。かやうな譯であるから、今日のペルシャ語は、たゞそれを眺めただけでは、インドヨーロッパ語系に屬するものなのか、セミト語系に屬するものなのかの判斷はつかない。ことに今日のペルシャ語は文法上の諸形式が殆んど全く磨り滅されてゐて、動詞の人稱語尾だけはどうにかまだ殘ってゐるが、名詞の格語尾などは影も形もなくなってゐるありさまなので、一層判斷が困難になる。今日のペルシャ語には Casus obliquus を示すのに -rā といふ後綴を用ゐるが、この -rā は中古ペルシャ語たるペフラヴィーでは rāy 古代ペルシャ語では rādiy といった前置詞がその本來の性質を失って、語助のやうな役目をつとめるやうになったもので、ペフラヴィー時代には時としてあらはれるといふ程度であったのが、新ペルシャ語の時代になって初めて慣用の言ひ廻しとなったのであるから、この rā といふ後綴は古代ペルシャ語の豐富なる名詞の格語尾とは何の關係もないものである。名詞の性を示す語尾もなくなった。男女雌雄の別はそれぞれ別の單語を以てあらはすか、男女雌雄をいふ單語と組み立てて示すのみ。そして文法上の性の區別 (Genus) といふものは、すでにペフラヴィー時代に消え失せて、今日のペルシャ語もそのごとくである。名詞の複數を示すには生命があると考へられるものには -ān 爾餘のものには -hā の後綴を以てする。こ

の -ān は古代ペルシャ語の複數生格の語尾 -ānān に由來するもので、すでにペフラヴィー時代に起り、その時代にはこの -ān をつけるのが、複數を示す最も普通の方法であった。-hā は由來を異にするが、これまたペフラヴィー時代に起ったもので、初には極めて限局された單語にのみ添うたものであるが、新ペルシャ語の時代になっては、無生物をさす單語のすべてに適用されるやうになり、今日に至っては、往々にして生物をさす單語にも用ゐられ、人をさす單語にさへも用ゐられるやうになった。かやうに文法上の諸形式が磨り滅されてゐるので、ペルシャ語の眞の姿は今日のペルシャ語をいかに長く眺めてゐても、到底これを知ることができない。これを知るには歷史の研究によらねばならぬが、幸にしてペルシャ語の中古を代表するものにはペフラヴィー、パーゼンド、パールシーがあり、その上古を代表するものには古代ペルシャ語とアヴェスタ語とがあって、歷史の研究には必要な材料が充分にある。ついでにいふ、古代ペルシャ語といふのはアケメネス王朝の金石文字に殘る言葉であり、アヴェスタ語とは大聖ザラスシュトラの教義を記錄した經典によって傳はる言葉である。歷史を研究すれば、今日のペルシャ語には、音韻に於ても、語法に於ても、語彙に於ても、また構文の法に於ても、古代ペルシャ語もしくはアヴェスタ語から傳はったものの少からざることが知られ、今日のペルシャ語に於て甚だ有力であって、殆んどその語法の根本をなすかとも思はれる形式にして、しかもペフラヴィーには全く存せざるものもあり、またペフラヴィーには遡ることができても古代ペルシャ語やアヴェスタ語などには全く見るを得ないものもあることが知られるので、今日のペルシャ語は古代ペルシャ語、アヴェスタ語の正統の子孫であって、ペフラヴィーの時代に著しくアラマイ語の影響を受け、さらに新ペルシャ語の時代に入って大いにアラビヤ語の感化を蒙り、今日見るがごとき姿をなすに至ったものであると論斷するのである。

われわれがペルシャ語をインドヨーロッパ語系の一つの言葉であるとするのは、實にかくのごとき歴史の研究によって致された論斷を基礎とするのであることを忘れてはならない。

ペルシャ語の外西アジヤの地に於て行はるゝ言葉で、インドヨーロッパ語系に屬するものには、東にアフガーニスターンに行はるゝパシュトー、バルーチスターンに行はるゝバルーチ、西にクルディスターンに行はるゝクルド語があり、これらはペルシャ語とともに一團をなし、名づけてイーラーン語群といはれる。その西北にはアルメニヤ語群があって、今は東アルメニヤ語、西アルメニヤ語の二つに分れる。小アジヤ半島の海波にひたさるゝところには、ギリシャ人の移り住むものの多きこと、今もなほ古と異なるところなく、そこにはギリシャ語が行はれ、これは別にギリシャ語群といふものをかたち造る。今日西アジヤの地に生存するインドヨーロッパ語系の言葉は左のごとくである。

イーラーン語群

新ペルシャ文語

カスピ海方言㊀マーゼンデラーニー㊁ギーレキー㊂ターリ㊃タート㊄セムナーニー

中央方言㊀ゲブリー㊁カーシャーニー㊂ナーイーン、シーヴェント

パミール方言㊀山のタジク一名ガルチャ㊁イドガー㊂シグァニー㊃ヤグフノビー

クルド語

パシュトー〇アフガーニスターンの言葉

バルーチ語

北方方言

南方方言

オセーチ語

アルメニヤ語群

西アルメニヤ語〇エルゼルム、ムシュ、ヴァン、デアルベキル、アクン、シヴァス

東アルメニヤ語〇エリヴァン、ティフリス、カラバク、黑海の西濱

ギリシャ語群

新ギリシャ語〇小アジヤ、シリヤ、パレスチナ、エジプトなどの沿岸地に行はれる

イーラーン語群の中最も古い遺存のあるのはペルシャ語で、それは古代ペルシャ語とアヴェスタ語とである。古代ペルシャ語はペルシス地方の言葉で、アケメネス王朝の宮廷語であり、アヴェスタ語は宗教上の言葉であるが、ともに西部イーラーンの言葉である。スキタイ語といはれるのは、北部イーラーンの言葉であらう。古代ペルシャ語にはダリヤワフシ一世の登極（西暦紀元前五百二十一年）からアルタフシャールシャ三世の殂落（西暦紀元前三百三十八年）に至るまでの楔形字を以て記した碑記がある。アヴェスタ語は古代ペルシャの大聖ザラスシュトラの教義を記録した經典によって今に傳はる言葉であって、これはブラフマーナの手によって傳はるサンスクリト、ラビの手によって傳

はるヘブライ語と同じやうに考ふべきものである。ザラスシュトラの經典は、普通にはアヴェスタといふが、古い形はAvistakであつて、これは原典を意味し、これが註疏たるzendといふ部分と合せて、Avistak va zendと呼ばれた。それがヨーロッパの學界ではいつしかZend-Avestaといひ誤るやうになり、さらに誤つてこの言葉をゼンド語などといふやうにまでなつた。もとよりよろしくない。アヴェスタ語といへば、まだしもである。この言葉の起つた土地を研究してバクトリヤであらうとし、古代バクトリヤ語といふがいゝといふ人もあるが、今日ではザラスシュトラの鄕土をバクトリヤと見做すのには贊成者が少く、多くは西方、ことにペルシスの地であらうといふのであるから、アヴェスタの言葉を古代バクトリヤ語などといふ譯には行かない。やはりアヴェスタ語といつて置く外はあるまい。アヴェスタの中に十七篇の古歌があり、これをその言葉でガーサーといふ。これらの古歌の書かれた言葉をガーサーのアヴェスタ語といひ、これに對してアヴェスタの他の部分の書かれた言葉を近アヴェスタ語といふ。これらの言葉の引きつゞきと見るべきものがアルサケス朝及びサーサーン朝に至つて、主として文學の言葉となつた。その言葉は今日ではずつと新らしい時代のものだけしか知られなくなつてゐる。これがペフラヴィーである。ペフラヴィーはすなはちパルチヤの言葉である。その言葉はアラマイ語の影響が頗る多く、アラマイ文字を以て書き、アラマイ語を一種のイデオグラムとして用ゐ、それをすべてペルシャ語の訓で讀むこと、我國で「松」と書いて、これを國語の訓で「マツ」とよみ、「山」と書いて、これを國語の訓で「ヤマ」とよむがごときものである。この書き方は困難なので、後に至つてはそれを克服して、專ら音を寫すやうにした。そのアヴェスタ文字を用ゐるものをパーゼンドといひ、そのアラビヤ文字を用ゐるものをパールシーといふ。ペフラヴィーの引きつゞきが新ペルシャ語である。新ペルシャ語

には西曆第九世紀に始まる文學がある。この言葉はそれからずっと今日に至るまで大なる變化を見ない。ペフラヴィーにアラマイ語の影響の著しかったことは、前に述べたごとくであるが、その影響を存したまゝ新ペルシャ語は徹底的にアラビヤ語と混じたのであるから、新ペルシャ語の中のセミト語の成分は殆んどその半を掩ふのも、また當然といはねばならぬ。今日のペルシャ語が雜糅語であるのは、實にかくのごとき歷史によるのである。クルド語はペルシャとトルコとを分つ山地の言葉であるが、この言葉を話す民の遊牧的性質はこの言葉を四方にひろげた。すなはち北はロシヤ領アルメニヤのエリヴァン及びカルスあたりまで、西はキリキヤに至り、シリヤにも及び、東は中部ペルシャ、ホラーサーンよりアフガーニスターンに至るまでの地にも行はれる。この言葉はペルシャ語とはよほど隔りがある。東部イーラーンの地に行はれる言葉はパシュトー、バルーチ語、オセーチ語である。パシュトーはアフガーニスターンに行はれ、かなり豐富な文學がある。この言葉はペルシャ語などよりも語尾の變化がずっと豐富である。動詞の人稱語尾は單數第一人稱 -am 第二人稱 -ē 第三人稱 -aī 複數第一人稱 -ū 第二人稱 -aī 第三人稱 -ī であって、これは別に取り立てゝいふほどのこともないが、名詞に男性女性の別があり、複數の語尾も男性女性の別に從って異なり、格は Casus rectus と Casus obliquus とを語尾によって區別し、その Casus obliquus の形に前に da といふ語助を添へて生格を示し、後置詞 la, lara; ta, vata を添へ、またはこの ta, vata とともに、或は單獨に前置詞 na を添へて與格を示し、前置詞 la, tar, da を添へて奪格を示し、もっともこの場合には na といふ後置詞をも添ふることあり、前置詞 pa を添へて處格を示すのは、注意すべきことである。例へば γar「山」といふ名詞の生格は、その Casus obliquus たる γr̥a といふ形の前に、da といふ語助を添へて、da γr̥a とするのである。で「山の石」と

いふには、「石」sxar といふ名詞を「山の」da γra の前に置いて、sxar da γra といへばいゝのである。この da といふ語助は、一目見たところでは、前置詞のやうに見えるけれど、實は關係代名詞 tya の變形に外ならぬといはれ、クルド語などでは、この場合に tya といふ形がそのまゝ用ゐられることがあるといはれる。ペルシャ語の名詞と名詞とを結び合せる i のごときも、文法家は古い關係代名詞 tya に由來するものと說明するのである。附加語たる陪詞は附加せられる名詞の性、數、格（Casus rectus と Casus obliquus と）に於て一致すべく、從って附加語たる陪詞はつねに八つの形式を作る譯である。かくのごときことはペルシャ語などにはないことで、ペルシャ語ならば、名詞と附加語たる陪詞との結合も、名詞を前に置き、それに i を添へ、後に附加語たる陪詞を置くこと、例へば pisar-i xūb「美しい少年」のごとく、たとひ名詞が複數になっても、陪詞の形式は變ることなく、pisarān-i xūb「美しい少年たち」といふのである。かゝる點に於て、パシュトーはペルシャ語などよりよほどアルカイクである。バルーチ語は南はオマーン海、東はインド河に沿うてダラ・ガジ・ハーンに至るまで、北はレギスターンの沙漠を越えてヒルメンド河の流域に及び、西はメクラーン及びセルヘドの兩高原を包括する地域に行はれる。すなはちバルーチスターン、インドの西邊の地、アフガーニスターンの南邊、ペルシャの東南邊、いはゆるペルシャ領バルーチスターンに行はれるのである。この地域の中部にはドラビダ語を話すものが住んでゐて、バルーチ語を話すものは南北二派に區別せられる。これによってバルーチ語も南北二方言に分れる。いづれも相去ること遠からず、極めてペルシャ語に近い。動詞の人稱語尾のごときは、よくペルシャ語に似てゐる。陪詞の比較級の語尾などもペルシャ語を思はしめる。名詞に Casus rectus と Casus obliquus との區別があるのは、ちょっとパシュトーのやうであるが、名詞に男性女性の別もな

ければ、附加語たる陪詞と名詞との一致といふこともないのは、ペルシャ語に似てゐる。オセーチ語は中部カフカズ地方に行はれる言葉で、その文法はペルシャ語などとはよほど隔りがある。

中古イーラーン語の一つにソグド語がある。これは三十年來中アジヤの地に於て行はれた發掘の結果知らるゝに至った言葉である。讀み得た碑文の文字はアラマイ文字の流を汲むものであるが、ペフラヴィー文字とはちがふ。西暦第八世紀より第九世紀までのものが大部分であるが、古いものも皆無ではなく、西暦紀元の頃のものもある。ソグド語のむかし文化語として演じた役割の大なることは、滿洲のカラバルガスンの地にある一つの碑が三つの言葉を以て書かれ、その一つがソグド語であることによっても知られると思ふ。ソグド語は北東イーラーン語ともいふべきものである。なほトルキスターンの地で行はれた發掘はホーターン地方の佛教徒に用ゐられた一つのイーラーン語を明かにした。それはサカ語である。サカ語は東イーラーン語ともいふべきものである。

アルメニヤ語群に屬するのはアルメニヤ語で、これは西暦第五世紀に成る遺存がある。古代フリギヤ語はこれに近いものらしい。もっとも古代フリギヤ語は遺存が極少ししかないので、古代フリギヤ語とアルメニヤ語との關係をはっきりさせるのは、極めて困難である。アルメニヤ語で、古く文學の用に供せられたものは、西部の言葉を本とするもので、いはゆる雅語である。これが宗教語、學術語となったのである。古代アルメニヤ語といふのはこれである。古代アルメニヤ語は西暦第十一世紀まで存する。その次が中古アルメニヤ語であるが、この時代の言葉はたゞキリキヤの言葉だけが文學の用に供せられた。その遺存は至って少い。近代アルメニヤ語は西暦第十五世紀に始まり、こゝに至って古くからあった東部の言葉と西部の言葉との相違がはっきりした。もっとも共通の文語といふものも發達し

て、兩部の統一には役立つてゐる。

ギリシャ語群に屬するギリシャ語は今も小アジヤの沿岸、小アジヤ、シリヤ、パレスチナ、エジプト等にある商業都市に土着する多數のギリシャ人に話される。この言葉はずつと古くは多くの方言に分れてゐたものであることが碑文によつて知られる。碑文の言葉は詩歌のやうに作つたものでなく、方言をそのまゝ書いてゐるからである。西暦紀元前一千年から同三百年までのギリシャの諸方言は、イオニヤ・アッチカ、ドリヤ、西北(エピロス、アカルナニヤ、アイトリヤ、ロクリス)エリス、アルカヂヤ・キュプロス、エオリヤ、パンフィリヤ等である。西暦第五世紀に共通語が成立した。これをコイネーといふ。文法は主としてアッチカ風、語彙は主としてイオニヤ風であつたが、これが勢を得て、自然の地方語は滅びて行つた。たゞ昔のラコニカの地にあつた一方言が今日なほパルノン河畔にザコニヤ語として殘るのを見るだけである。中古ギリシャ語は西暦第十一世紀から第十六世紀までで、西暦第十六世紀から近代ギリシャ語が始まる。

アジヤのインドヨーロッパ語の一つとして忘るべからざるものにトカラ語がある。トカラといふ名はストラボーンの地理書にも見え、インドの書にも見え、シナの書にも見えて、人の知るところであつたが、これについての詳しいことはわからなかつた。西暦第二十世紀の初に東トルキスターンに於て行はれた發掘によつて出て來た書きものに用ゐられてゐる言葉にこの名を負はせるやうになつてから、この古來知られてゐたトカラといふ名がはじめて有意義になつたのである。この東トルキスターンの地で發見された言葉をトカラ語と呼ぶやうになつたのは、發掘された書きものの中に Maitreya-Samiti をこの言葉に譯したものと、ウイグル語に譯したものとがあり、いづれも斷片である

が、この言葉に譯したものには譯者自らその題签に Vaibhāṣika ĀRYACANDRA と署し、ウイグル語に譯したものには「Vaibazaki Ariacintri によって……インドの言葉より toxri の言葉に譯されたる本に據る」とあるので、この言葉をウイグル人が toxri と呼んでゐたことが知られたからである。この言葉をトカラ語と呼ぶことには、その後も異論がないではなかったが、研究の結果、今日ではもはや異論はなくなった。この言葉はインド傳來の文字で書かれ、その内容はサンスクリット文學の影響が著しく、從って按讀もそんなに困難ではなかった。その書きものは醫術に關するものと、佛教に關するものとであって、その一部はサンスクリトからの飜譯であった。この言葉は二つに區別せられ、一つをトカラA、一つをトカラBと呼ぶのであるが、トカラAはトゥルファンの言葉で、これをトゥルファンのトカラ語とも、またトゥルファン語ともいひ、トカラBはクチャの言語で、これをクチャのトカラ語とも、またクチャ語ともいふ。たゞし段々研究を加へて行くと、トカラAだけが眞のトカラ語を以て目すべきもので、Bはトカラ語ではないといふこともわかった。この言葉はインドの言葉にも近からず、イーラーンの言葉にも近からず、アルメニヤの言葉にも近からず、却ってギリシャ語とは一脈相通ずるものがある。しかもギリシャ語群などと相竝んで一つの獨立の語群を形づくるものなることが、やうやく確めらるゝに至った。この言葉はたゞ地中から掘り出された書きものの上にのみ見え、もはやこれを用ゐる民はないのである。しからばこの言葉はいづれの時代に實際に人の口に上ってゐたものかといふに、それも詳しくはわからず、たゞクチャから出た書きものの中に旅隊に附與せられた通行免狀があって、それに Suvarnate といふ王の名が見え、この王はシナの史籍によれば西暦第七世紀の前半にこの地を支配してゐたものであることが知られるから、少くともクチャの言葉は西暦第七世紀の前半にこの地に實際行はれてゐたも

のと認め得るといふだけである。從ってこの言葉の死滅した時代のごときも見當がつかない。

アジヤのインドヨーロッパ語の一つとして忘るべからざるものには、なほハッチの言葉が數へられる。ハッチ國民の用ゐた言葉はハッチ語、プロトハッチ語、ルーヤ語、フリ語の四つに分れるが、その中でハッチ語とルーヤ語とがインドヨーロッパ語に屬するのである。ハッチ語、ルーヤ語はイーラーン語群やアルメニヤ語群などには遠く、むしろギリシャ語群などに近いといふことである。

四

今日のトルコ語は雜糅語である。イェリーチュカのいふところによれば、トルコ語にはカバ・トルコ語、オルタ・トルコ語、ファシフ・トルコ語の三階段があり、カバ・トルコ語といふのは、普通のトルコ人の用ゐる言葉で、アラビヤ語、ペルシャ語を混ずること甚しからず、用ゐられるアラビヤ語、ペルシャ語は殆んどトルコ語と同化したものばかりであるといふ程度であるといはれ、オルタ・トルコ語は學識ある階級に話される言葉で、かなり廣い範圍にアラビヤ語、ペルシャ語がはいってゐるものであり、ファシフ・トルコ語は洗練された上品な言葉であって、同時に詩歌の言葉であり、アラビヤ語、ペルシャ語を加ふることに、殆んど制限がなく、時としては始から終まで殆んど全くアラビヤ語とペルシャ語とであって、僅かに關係を示す語、主たる動詞だけがトルコ語であるといふやうな文さへあるといふ。ファシフ・トルコ語の上乘なものになると、學識あるトルコ人でも、辭書と註釋との力によってやっとのことで了解するといふのであるから、どんなものであるかがわかるであらうと思ふ。ファシフ・トルコ語などはこゝ

で問題にするには及ばない。最も普通なカバ・トルコ語でさへ、アラビヤ語、ペルシャ語の混入は殆んど半に達してゐるのである。

トルコ語系に屬するもので、西南アジヤの地に行はれるものは、かなり多く、これを類別すれば、數箇の目を作ることができるが、今こゝにはこれを略すことにする。

トルコ語系といふのは、ボスニヤからシベリヤの東北部までを包括する廣い地域に行はれる言葉であって、トルコ語、タタール語、キルギス語、ヤクート語などと呼ばれる言葉の群をいふ。トルコ語系は二つの部分に分れる。一つはSトルコ語であり、他はJトルコ語であるが、Sトルコ語といふのは、ヤクート語とチュヴァシ語とであって、ここには關係がない。ついでにいふ、ヤクート人はレナ河の流域を中心として、東はコリマ河に及び、西はハタンガ灣に至るまでの地に住む種族であり、チュヴァシ人はカザン、アストラハンに住む種族である。Jトルコ語を話すものは、アルタイ山中の小部落の民、その西にトボル人、バラバ・タタール人、東トルケマタン人、中アジヤのキルギス人、ウズベク人、カラカルパク人、サルト人、チュルクメン人、南カフカズにクミュク人、カラチャエル人、ノガイ人、カザン、イェカテリンブルク、サマラ、オレンブルクの地にカザン人及び他のタタール人、クリム半島にクリムタタール人などがある。

現存のJトルコ語中、最も重要なものはオスマンリ・トルコ語で、これを話すものが約千三百萬人あり、その文語は西暦第十四世紀のものからある。

昭和十一年七月十日印刷
昭和十一年七月十五日發行

岩波講座 東洋思潮
第十七回配本

編輯兼發行者印刷者　東京市神田區一ツ橋　岩波茂雄
印刷所　東京市神田區錦町　精興社

大森製本

發行所　東京神田一ツ橋　岩波書店